地目当も無之故与存候間、此度別紙之通、ヶ条書いたし候、何れも一覧之上、後ニ迄も差支無之存寄も無之候ハヽ、浜松江も差遣、何も存念有無承り可申越旨、可申遣候、

子七月

別紙書付者、何茂存念無之節ニ至り、目付方江為見置候筈ニ而認候、

同年八月

「御勝手方江被成下」（朱筆）

「（朱筆）廿三」家中渡米相応之義、以来者遠州・江州・摂州・河州、毎冬払米平均を以、翌年中可相渡候、右之趣、浜松・江戸江も可申遣候、

子八月

「（朱筆）同」

「（朱筆）廿四」毎暮、於浜松、糯米家中江相渡候義、以来者知行所之分ハ、証印之内江相渡、扶持方取以下、或軽輩之分者、毎年可遣候、是者直段之勘弁も可有之候、右勘行取初糯請取高ハ、其分限ニ応相定置、別段入用之者ハ、其時限り断ニ而相渡候様相成候ハヽ、都合ニ宜由ニ相聞候、浜松吟味役共、存寄をも相尋、其外差支も無之哉、取調申越候様可申遣候、

子八月十一日

右者存寄も有之一通之慎、隠居とも訳違候間、其心得ニ而重く有相心得候、依之已後、本文之通書加へ候計ニ而、評義之下ヶ札ニハ不及候事、右之外、評義之通可相心得候、

亥六月

同年九月

（朱筆）「十八」当八月廿三日、目付役所江取揚候小筒四挺、手入も不行届候間、大納戸役所江預り置、磨等申付候積り取計候由、右者、昨年大坂ニ而、以来武器類取上物・欠所物等者、大納戸役所江引渡可申旨申付、其通相成候哉与存候処、右鉄砲、是迄目付役所ニ有之段、間違与存候、以後之處、取揚候ハヽ、直無程大納戸江可引渡、且大納戸ニ而も、右様之類者、別帳ニいたし調置可申候様、浜松江可申遣候、

（朱筆）「〇」文政十一年戊子三月

（朱筆）「十九」先日、浜松江相廻候唐櫃之儀者、御朱印長持江是迄　御代々之御位記・口宣等入有之處、其後自分之分も入余程張候間、此度唐櫃之方江、御位記・口宣等を相移、長持江者御朱印計入れ、両方とも馬廻番所江可差置積りニ候、其通相成候ハヽ、若　御朱印も、此度唐櫃之方江移候而者間違候間、一応可承遣候、

但、唐櫃棹者、先日も申遣候通、道中計ニ而到着後、非常等ニ而も、唐櫃江直ニ棒結付候而、持出し候事ニ候、

子三月

同年五月

（朱筆）「二十」

子五月
尋之者、不尋出候節、当人并其外咎、老共手限り差図候様申遣候、書付、

百姓・町人致家出、親類・組合等江尋申付、六切立候而も不尋出候節、当人并所役人等咎之義、郡奉行ゟ伺出候節、是迄者此地江相伺候上及差図候得共、以後子細無之分ハ、度々之例を見合、老共手限り及差図、其後伺帳等有差越候子細有之分ハ、是迄之通、可伺越候事、

子五月

御別紙

（朱筆）「廿一」密通之類、毎度目付方ニ而取調候、右ハ其本夫、又者親類等取揃可申事ニ付　公儀ニ而茂求て之穿鑿者無之候、剱戦沙汰ニも及候節者、表発之事ニ候得共、風聞等を以穿候義者、先見合候様無急度、目付江為心得候様、浜松江可申遣候、

同年七月

（朱筆）「廿二」目付方隠密取調之義、是迄者内外之無差別、厳重ニ取調候而差出、其都度取捨いたし候得共、中ニ者取調方甚敷も有之候、下

（朱筆）「十四」

亥三月
人別除帳之義、郡奉行伺出候時、老共
手限及差図候様、申遣候間書付、

天神町百姓孫蔵、外壱人義、差紙付候以来、家出いたし候ニ付、人別除帳之義相伺候、何之通、除帳可申付旨、郡奉行江可申達候、一以後右様之類、除帳之義も伺候様、郡奉行江申達置伺出候ハヽ、老共手限承届可及差図候事、

三月

（朱筆）「十五」

浜松江可申遣事、

志賀主税掛伺候吟味書之内、上刑部村百姓勇吉歳附言三拾四歳与有之、自分同年ニ相認候、都而吟味伺等ハヽ、不潔之物故　公儀御年齢ニ不同様可致、右ニ準候而者、自分一家之事故可有差略事之旨、先年郡奉行江相達候心得居候筈ニ候、右不審之趣、当番ゟ申呼候而差扣伺不及、其義旨可申達様可申遣事、

三月

（朱筆）「十六上」

別紙次第書調之通ニ而よろしく候、尚又発明之次第、右ニ見合可取調旨可申遣候、

一両家隠居門前江出居、目見之節ハ息才欤与可申候間、其旨可認入候事、

三月

同年四月

（朱筆）「十六下」

亥四月
五社大明神神輿、城内御幸之儀ニ付、
申遣候書付、

五社大明神神輿、城内御幸之義、差支も無之候ハヽ、神主願之通可申付候様、郡奉行江可達候、且右ニ付、警固等之儀取調可申候、

亥四月

同年六月

（朱筆）「十七」

亥六月
京都所司代蒙　仰候ニ付、藩中
大肆伺書ニ付、申遣候書付、

此度、京都所司代蒙　仰候ニ付、大肆伺書之内、

元大納戸手代
加藤幾蔵

右者盗之筋ニ者無之、私欲之方ニ付、以後其心得ニ而、評議之事、尤、此度ハ年数未満ニ可致置候事、

元近習
二本松一介

一左京様・栄吉殿、於寝間別段御対面、
以上、

同所出立申候日、

一左京様・栄吉殿、於寝間御対面、
一居間江着、
刀掛出有之、
一熨斗
一左京様・栄吉殿、御出座・御対面・御退座、
一家老共、老共罷出、恐悦申上、
但、彦右衛門、長も相受罷出候事、
右、畢而発足、家中并者頭目見等如着日、
以上
右之趣ニ次第を付、尚もれ候事者加へ、文例等如先例可仕、
一着日何も着服之事、
一発足同断之事、
一当番老ゟ差上物渡物之事、此度者一宿之事故、無其儀事、

（朱筆）「〇」文政十年丁亥正月

御別紙

（朱筆）「十二」此度昇進之為、祝儀如昨年、大赦宥可申付間、夫々可申達事、

亥正月

（朱筆）「十三」浜松江可申遣事、

一一昨年入部之節、町方者男子者土間に罷在、主人之分者、両落江出、婦人ハ床力之上ニ而通行之節、平伏候様申遣候処、通行之節、男女とも土間江罷出候、此度ハ、前書定之通、無間違様可申付事、
一市中、昨年者肆先江障子等をはめ置候、一体肆ハ昨年置可申事ニ付、下宿等ニ相成候處者、昨年之通ニいたし、其外者肆先乍障子不残取払い、肆与奥与之間与之際ハ、障子又ハ屏風等之品を以、囲可申旨可申付置事、
一此度郡方江申付、市中木戸挑灯等出来之筈ニ候之間、最早出来候ハヽ、木戸者通行之節〆置、町役人壱・両人固メ可申、尤、横町之者、見物ニ出候ハヽ、本道内江入れ行義能為見可申候、其上木戸を〆置、往来を留可申事、挑灯出来候ハヽ、明日着之節不及燈、只掛置、明後暁出立之節者、為燈可申候、一体挑灯数、未た少候間、挑灯之間江者、明後暁之處者、矢張是迄も通行、燈等取受候様可致事、
右之趣、郡奉行江達置可申事、

亥正月廿四日

同年三月

一都而夜行いたし候家中之者、一ヶ度ニ而も可咎事、
一在方ニ而林盗伐いたし候者、一ヶ度ニ而も可咎事、
右之類ハ、目付共ゟ申出候品ニより、前件に見合、咎伺并吟味申付等可致事、
一在町不人柄者、是者其処之役人可取扱節ニ付無構、乍然、所役人ゟ利解等願出候ハヽ、郡方江呼出し、利解申聞候事者不苦事、
一在町密通事、
右者目付共ゟ申出候とも、下方ゟ不申出事済之事者無構、出入欤願等ニ而、下ゟ持出候ハヽ可相糺事、
右者、先達而目付共ゟ申出候義、些細之事者捨置可申旨申遣候得共、右凡之見込も無之而者、疑惑ニ付、若当候儀計ヶ条いたし候間、先当分右之心得ニ而可有取捨候旨、浜松江可申遣事、

戌十月

同年十一月

御別紙

（朱筆）「十」浜松絵図、

一城并城下領内、惣絵図　一枚

一城郭并住居向家中屋、長屋城下・市中共之図　一枚

一住居向計明細絵図　一枚

右何も手元ニ無之候間、相仕立可差越、尤、彩色ニいたし、表紙薬帋紙抔之類ニ而可然候、畳ミ上ヶ壱尺ニ七寸五分位ニ相成候得者、別而宜敷候間、其心得ニ可仕立旨、浜松江可申達候、

（朱筆）「十一」浜松着発之事、

浜松着日

一火消番・者頭、領分堺江罷出候駕、脇名計披露詞有之、直欠抜致、先懸可申事、
一大手当番・者頭、番所前ニ罷出、目見披露等、次第同前、
一玄関上ゟ家中之者並居、何も通り掛、目見、
但、先立如前例、
一左京様・栄吉殿、御出迎、
一居間江着座、
刀掛出有之、
一熨斗　小姓
一左京様・栄吉殿、御対面御悦被仰聞、御退座、
一家老共、老共罷出候、恐悦申上、
別段、
一彦右衛門、長罷出候、恐悦申上、
畢而

無宿者も、字之有之方、追而分り安ゟ候間、右之趣相心得、以後肩衣委敷いたし候様可申遣候、

御別紙

（朱筆）「六」公儀大赦律ニ見合、赦法取立候間、致一覧差支も無之哉、存念も無之候ハヽ、浜松江遣し、写相済、江戸江も相廻し、写候上可返候、

同年九月

御別紙

（朱筆）「七」当時物成之外、百金以上益ニ可相成義、心付候者者、目付役所迄可申出候、取捨之上、無差支取行候ハヽ、其者格別之功分ニ候事、

右之趣、士軽共不洩様無急度、逐々相達可申事、

同年十月

（朱筆）「八」戌十月
老共手限ニ而及差図候仕置之儀、
申遣候書付、

一無宿ニ而致帯刀
刀ニ而も
脇差ニ而も取上
領分立廻り候者、
領分払

但、領分払申渡、再ひ領分江立入間敷旨申付、非人共江相渡、領分境ニ而こなし候上可払遣、尤、領分境迄、同心等如常差添可遣事、

右者、刀又者脇差等を帯候迄ニ而、外ニ悪事無之分者、吟味伺書差出候上、此方江不及伺越、可及差図候、外悪事も有之分者、可伺越事、尤、仕置も不相用、再立入候分、并其後領中ニ而悪事いたし候分ハ、此方江可伺越事、

戌十月

（朱筆）「九」戌十月
目付方ゟ申出候儀ニ付、当分明捨之ヶ条書付、

一在町博奕打候者、全一時之慰ニ而、一・両度も集候迄之義者可見込、三度以上度々にも相成候ハヽ、可為致吟味事、

一家中之者共、城下ニ而売女買上、及遊興候者、一ヶ度ニ而も咎之事、

一同断城下并領中ニ而酒店等江、内々忍候而、立寄飲酒候迄之者者、一・二度迄ハ見合、三度以上常之様ニも心得、又者忍ひ候体も無之候ハヽ可咎事、

一見附宿等江取越候家中之者、昼之内計一・二度も参り候者者可見合、三度以上、又者常之様ニ相心得、忍候体も無之分者、一体之風俗ニ拘り候間、可咎事、

一同断夜分罷越候欤、又者止宿いたし候分、一ヶ度ニ而も可咎事、

申募り候間、遊行方江も、已後之處申付も有之、旁我侭不為申、兎角先役より当役之格ニ而、手軽ニ取計、彼方ゟ望ヶ間敷申出候ハヽ、大坂江承り候上可及挨拶旨可答事、

戌三月

一岡崎ニ而者、使者等札呈候義断候由ニ候得共、是者貫候而も不苦候、

（朱筆）「一」

戌三月

闕所物武器之儀ニ付、書付、

郡方目付方等ニ盤取上候欠所物之内、武器之分ハ、以来取上候役所ゟ、大納戸江為納候様可致事、

右無差支候ハヽ、夫々有為心得事、

戌三月

下知書之振合ニ見合可認加旨、以後心得ニ可申達候、

同年五月

（朱筆）「三」別判分限帳江、勝手役之分者、役成年号肩書ニ書入候様、且早ゝ取調、差越候様可申遣候、

同年六月

（朱筆）「四」

戌六月

目付方申出候儀、取上有無之事申遣候書付、

近来日付共申出候義、不限何事多分取上、及沙汰候、政事向者、大小となく、不無様取計候之儀相当ニ候得共、一体目付共者、事之大小を不論見分及候儀、其侭申出候役筋故、申出候事多きを、手柄之様ニ存居候、然處、其事ニ及沙汰候而者、善悪共ニ余り、小世話をやき候様ニ相成、下々展處無之、後ニ者今日之進退も困り候之様可相成、附而者以後目付共ゟ申出候事も、其品ニより聞置含至等ニいたし、無據分者、沙汰もいたし候様可取計与存候間、其地ニ而も同様相心得可取計、尤、其事者同様ニ而も、大小之違有之候得者、其事者取上、此義者聞置与申規矩者出来兼候間、其節之模様次第差略物与存候、勿論銘々見込も有之義故、其地ニ而聞置ニいたし候事も、追而此方ゟ及沙汰候様申遣候事も可有之、是者致方無之候間、聊致懸念間布候、且又目付共方ニ而者、申出候計之役筋ニ候得共、其事共一々不取上候と而、彼是申出候儀者有之間敷、万一申出候者も有之候者、心得違之事ニ候、

戌六月

御別紙

（朱筆）「五」郡奉行取扱候吟味書、其外書付人名・肩衣之處、江戸表之振合ニ逐々相成候處、此地之書法者委布分り能候間、別紙出精遣候

異国船之儀、早速申来一段之事ニ候、一体遠州□江者参間敷与申事ニ候處、右之仕合油断不相成事ニ候、横須賀・懸(掛)川人数も、此方与早々多く与相聞候、然ル上者、模様ニ寄、人数増候方可然、宜可取計旨可申遣候、且相良沖者東より与存候、尚疑分江茂来り候ハヽ、無手抜様兼而申付をも見合、段機之取計可有之旨申遣候様存候、

一風聞書等者、留置可申候、

一国者何方ニ候哉承り糺可申事、

同年二月

「(朱筆)一中」坂東仁右衛門儀、先日出張之節、格別手廻宜敷、兼而組之者江も申付方行届候事、一段之旨、誉置候方可然与存候、貞四郎儀ハ、先日咎申付候間、不及沙汰、

一相良沖江来り候唐船者、十二月出帆ニ而ハ無之哉、船名永泰得泰恒順等之内ニ候哉、長崎江廻り候内之船ニ候哉、右便之節、承り遣可申候、

一遠州江来候唐船之船主之名、承り糺申越候様可申遣候、

同年三月

「(朱筆)一下」戌三月遊行上人取扱振、郡奉行伺之趣ニ付、申遣候書付、

遊行上人取扱向、郡奉行伺之趣左之通可相達候、

一野間案内并町中案内共伺之通、尤先払之者遣候間、人を制し、下ニ居らせ候ニ者不及儀与存候、

一逗留中、町中見廻増廻ニも及ひ申間敷事、

一宿寺見廻り伺之通、出役詰所等在宿之場所盤、相隔候ハヽ、可然、左も無之ハヽ、上ゟ申付候而も可然見計、可取扱候事、

一箱番所同断、伺之通、

一贈物伺之通、尤、口上振等者被贈候与申格ニ而、可然使者勤候とも、寺社奉行調役江、応対より少シ手軽位ニ而も可然、　公儀ニ而者、自余之寺院ニ格別替り候事与無之候、僧正之格ニ候間、其心得盤敬し過候而ハ不宜、殊ニ当時寺社奉行ゟ上役ニ而候間、先役之振会ゟ見合も有之、旁丁寧過不申候様可致事、

一別段贈物不致事、

一上ヶ畳其前二ヶ条共、先例無之旨ニて取計申間敷事、

一宿寺修復致間敷事、

一郡奉行等、出役ニ不及候事、

右之趣、郡奉行江申達候事、

一札等到来候事、自分并奥計ニ而、其外者相断可申候、自分ゟ為挨拶、銀壱枚か弐百疋、奥ゟ右ニ可準候見合可取計候、尤、右札之為礼遣候与認出し候得共、是者為挨拶贈候旨、口上可申述候事、

右之外、成丈ヶ手軽ニ可仕候、近来薩州ニ而遊行方、彼是我侭

「同年六月」（朱筆）
「四」（朱筆）一御目付申出候儀ニ付　御書付、
「五」（朱筆）一郡奉行取扱候吟味書之属ニ付　御書付、
「六」（朱筆）一肆赦律令之儀ニ付　御書付、
「同年九月」（朱筆）
「七」（朱筆）一御物成之外、百金以上御益ニ可相成儀心付候者之儀ニ付
御書付、
「同年十月」（朱筆）
「八」（朱筆）一老共手限り及差図ニ候御仕置之儀ニ付　御書付、
「九」（朱筆）一御目付ゟ申出候儀ニ付、当分取捨之儀ニ付　御書付、
「同年十一月」（朱筆）
「十」（朱筆）一浜松絵図面仕立之事、
「十一」（朱筆）一浜松　御着発、御次第之事、
「同十亥年正月」（朱筆）
「十二」（朱筆）一御昇進・御赦宥之儀ニ付　御書付、
「十三」（朱筆）一浜松　御入部之節、町方之者心得方之儀ニ付而之事、
「同年三月」（朱筆）
「十四」（朱筆）一人別除帳之儀、老共手限り及差図候儀ニ付而之　御書付、
「十五」（朱筆）一御年附之儀ニ付、志賀主税差扣伺之儀候間　御書付、
「十六上」（朱筆）一御発駕御次第書取調之儀ニ付　御書付、
「同年四月」（朱筆）
「十六下」（朱筆）一五社大明神神輿、御城内御幸之儀ニ付　御書付、
「十七」（朱筆）一京都御所司代被蒙　仰候ニ付、大肆伺書ニ付　御書付、
「同年九月」（朱筆）
「十八」（朱筆）一御目付役所ニ取揚候鉄砲之儀ニ付　御書付、
「〇同十一子年三月」（朱筆）
「十九」（朱筆）一御唐櫃江　御位記等入候儀ニ付　御書付、
「同年五月」（朱筆）
「二十」（朱筆）一御尋之者不尋出候節、当人并其外御咎老共手限り差図之
儀ニ付　御書付、
「廿一」（朱筆）一密通・穿鑿方之儀ニ付　御書付、
「同年七月」（朱筆）
「廿二」（朱筆）一御目付・隠密取調之儀ニ付　御書付、
「同年八月、御勝手方」（朱筆）
「廿三」（朱筆）一御家中御渡米之儀ニ付　御書付、
「同」（朱筆）
「廿四」（朱筆）一毎暮糯御家中江御渡之儀ニ付　御書付、

（半丁分余白あり）

〇文政九年丙戌正月
「一上」（朱筆）異国船ニ付、人数出張候ハヽ、其趣江戸ニ而御届可申与存候、
早々浜松江も申遣、可然取計候様、浜松江申遣候様存候、
御別紙

以後前書四ヶ所者、自他之勘定ニ而弐帳ツヽニいたし、年々差出、猶又浜松ニ而惣〆勘定いたし候様相成候得者、年々之入費多少も相分、第一之取締ニ付、以後右之処碇と可取計与、夫々へ可相達置事、

右書面之趣ハ、吟味役共へも申聞不苦候ニ付、実用取締候様可使候、

酉十一月

（朱筆）「同」

（朱筆）「六六」御別紙

此度勝手主法付候上ハ、江戸借伐（財）之内、公金上野増上寺方丈手金ハ相除、其外者年数改切候様可仕候、浜松も領分之外、同前ニいたし、領分金ニ而も主法之付候丈者、取扱其余者領分外ニ而借用肩かへ等いたし候様、追々取計可申候、大津茂領分中ハ同前領外之分ハ断切ニ可取計候、大坂も樋口・大嶋・金井等、旧来之分ハ相除、其外ハ断限り候て可然候、右等能々行届、省略之廉相立候様可仕候、

酉十一月

同年十二月

（朱筆）「六七」

酉十二月　馬廻中・小姓下立、判取帳評義之通申付候儀、申遣候書付、

馬廻中・小姓下立番勤帳判取之義、目付へ評義之通相心得候様申達、承付為差出候事、

右評義書手元ニ而見合之儀有之候間、半紙帳ニ認メ差越候様可致候、

酉十二月

（半丁分余白あり）

目録

「〇文政九戌年正月」（朱筆）

（朱筆）「一上」一異国船漂着ニ付　御書付、

「同年二月」（朱筆）

（朱筆）「一中」一坂東仁右衛門、異国船漂着之節、出張手廻宜敷御賞之儀ニ付　御書付、

「同年三月」（朱筆）

（朱筆）「一下」一遊行上人取扱振之儀ニ付　御書付、

（朱筆）「二」一闕所物武器之儀ニ付　御書付、

「同年五月」（朱筆）

（朱筆）「三」一御分限帳江御勝手役之分、年号書入之儀ニ付　御書付、

小納戸を以可申聞候、

（朱筆）「六三」御別紙

当地へ移封後之罰文、未た不致出来候間、唐津之振合ニ見合、当国之神社を加へ相仕立候様存候、尤、不差急候間、追而取調、大坂江可差越候、

但、八幡・天神者、矢張伊豆・箱根・三嶋同様ニ而、鎌倉ニ附属之神社ニ付、此度ハ除き、当所之八幡ニ候得者、加へ候而も可然候、

右等相考取調可申候、

酉九月

同年十一月

（朱筆）「六四」

酉十一月
馬廻中・小姓番勤帳、宅へ判取ニ、歩横目遣候儀、相止メ候様申付候書付、

馬廻中・小姓番勤帳判取落候節、其者宅へ歩横目遣、判取候も不相当之儀ニ付、以来右様取落取直し等之節とも、殿中ニ而相済候様之次第を付ヶ可認出旨、浜松目付へ可申付候、

酉十一月

「同年十一月、御勝手方」（朱筆）

（朱筆）「六五」

勝手方江

此度猶又者略主法附候ニ付、小河三郎出坂茂申付候上者、愈以此後格従相整候様可仕者、勿論之義ニ候得共、是迄毎度積り帳等仕立、自用ハ全ク取締候得共、借財方多くニ付、年々後引ニ相成候事ニ候、此度とて茂、諸向借財此侭居置、内向而已相詰候とて、借財方へ可行届筋ニ者無之候へ共、省略第一之義ニ付、夫ゟ外手段も有之間敷、隨分内向取締付ヶ、夫丈ツヽ之功分見へ候様ニ無之而ハ、一向励も無之事ニ付、此度ゟハ、是迄之通詰候計ニ無之、取締付ヶ候、丈之功験ハ相見へ候様可取調候、依之公務并自用家中扶助等之分、浜松・江戸・大坂・大津之四通りニ調、尚又致合帳借財ハ、右四ヶ所共別帳ニいたし、夫ニ相副、公務并自用家中扶助等ハ、自与心得、借財向者他と心得、自他之入用能く相分り候様可仕候、右之通、自他之入費相分候上ハ格別、是迄之通自他混雑之侭、何方へ入り候哉之見当も無之、家中増減等之儀者、容易ニ難申付候間、右自他入費しかと相調候上、可申聞事、

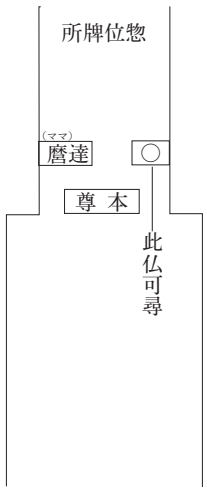
一是迄年々積り帳ハ、其時限り出来候得共、補方ニ而其年相隔候て茂、勘定仕上之状差出候儀無之候、只々差掛補方計ニも無之、年々ニ勘定ハいたし、不足之處、借財を以補候訳等調候得者、勘定難出来与申義有之間敷、右様其處不取締ニ而ハ、此上主法付とも、其法被行申間敷、其上一ヶ年之入用何程ニ候哉不相分儀ニ付、

右壱人ツ、罷出次第同前、

一右畢而於寝間、目見当番誘引被下拘等有之処、此度者家老・老共茂、別段被下無之間、両人共被下初無之ニ付、寝間ニ而者、目見無之事、

（朱筆）「六十」御別紙

西来院左之図之処ニ安置いたし置候仏像ハ、何と申仏ニ而哉、古仏之様ニ相見申候、時代作等取調申出候様可申達候、唐物とも相見へ申候、



（朱筆）「六一」御別紙

御太刀馬代

干鯛　　家督之御礼　宇兵衛

御樽一荷

右干鯛弐之間、国内下ゟ弐畳目下樽者、同間下ゟ壱畳用上へ差置、太刀目六（録）老共持出之弐之間、国内下ゟ壱畳目中比ニ差置、国外江披き当人罷出、国外ニ而礼披露、夫江と申之、国内江入り、家督之礼申上候旨、老共取合、当人退去、太刀目六（録）并進物引之、

源左衛門　内　蔵

何茂右之趣ニ而、見合可取扱事、

嶺岸半内

右披露御槍奉行被　仰付、難有仕合之旨、老共言上之、是江と御意御手熨斗被下之、復座御手熨斗被下、難有仕合之旨、老共言上退去、

（朱筆）「六二」御別紙

十七日

発駕前日ニ付、諸役人差出候義ニ候ハ、、左之通、

居間

一当番老罷出、諸役人差出候旨、申上退去、

郡奉行
目付
吟味役

此外定例差出候役人之分

右一役意差出可申、尤、最初襖際江罷出、近く出候様申候ハ、、上之間国之際まて、近く罷出候様可申達置候、

右諸役人差出候儀、先例無之候者不及其儀候間、否帰り之節、

関馬廻江茂、為心得書付可遣候、

一門々如前件、無進滞様可致候、

一右問屋呼出、其外之差掛り用向も可有之間、公用方ニ而遣候人ニ而も、手当いたし候哉、公用方ゟ使之義等申達候向心得ニ而も達置候哉、両様之内不都合無之様、何も可手当いたし置可申事、

酉九月

（朱筆）「五六」御別紙

九月十六日

朝六半時、供揃清メニ而、狩衣着　霊神様御宮江参詣相済、直本城一覧帰殿、

一即刻供揃ニ而、五社・諏訪・秋葉・西来院、其外へ参詣、熨斗目麻半袴、

右之途中、家中屋敷も有之候者、通り抜なから、巡見之事、

一右、帰宅後、無程野服ニ而、鷹野出同様之振合ニ而、巡見之事、

九月十七日

一朝六ッ時、供揃ニ而巡見ニ罷出、昨日之通、

（朱筆）「五七」

規式出之節、先立之儀ニ付、
書付、

規式出之時者、座鋪内老共、先立ニいたし候様ニ、唐津表ニ於て申付候得共、以来古格之通、用人先立可申付候、差支之節者、近習ニ可申付候、

酉九月

（朱筆）「五八」

酉九月
大坂表万端取計之心得申付候
書付、

大坂表之儀、御役場ニ而御用弁第一之儀、自用之事も同様手短ニ埒明候様取計ひ、諸役共万端江戸表之振合ニ可相心得事、

右之趣可申遣、此地出立前ゟ、諸役江茂為申諭、浜松へも可申通候、

酉九月

（朱筆）「五九」御別紙

九月十六日

居間　大河内八助

右弐之間、国外際へ罷出、礼当番名計披露夫と申之、国内江入り着城祝儀申上候旨、当番老取合、是江と申之、手熨斗出之、弐之間国外際へ、復座手熨斗被下難有旨、当番老取合退之、

但、手熨斗者、上之口ゟ差出、

中村軽羽
実蔵葉常替

一相伴出候時、膳ハ自身持出、又持退候得共、此度者給仕申付候事、
一否初二献次之肴遣之、持退候得共、此度者加有之事、
一縁頼ニ而相伴之処、此度者二之間国内ニ而相伴申付候事、
　　酉八月

（朱筆）「五一」御別紙

着城之節、次第書ニ入城之祝儀と有之候、入部祝義ニ候哉、着城之祝儀ニ候哉、一体入部ニ付、着城之祝儀ニ候得者、入部之祝義と申候而茂、宜鋪候哉、元来入部之祝儀ニハ無之、着城計之儀ニ候ハヽ、其趣ニ而宜敷候、否之心得承ニ遣申候、

（朱筆）「五二」御別紙

浜松居間之義、唐津ハ廻り入側ニ候処、浜松ハ二間ニ相成居、三之間ハ次之仕来間之由ニ付、取払ニも難相成候ニ付、朱紙附候通、無目敷居を入れ候様可申遣候、尤、畳ハ中之畳ニ而伴着候而も、中を下ニ而伴着候而も宜敷候、
　但、無目鋪居ハかりニ入れ置候心得ニ而、仕日いたし置可申着前之間ニ合候様可致候、
　　酉八月

（朱筆）「五三」御別紙

唐津之趣ニ而、廻り候様通り仰付候事と存候得共、此度ハ廻り不申候而も、相済候様、都合を付ヶ、歩士并町医師等之類者、大書院与表座敷へ出、見通し之処ニ而目見等相済候様可相成哉、其心得ニ而付ヶ可申候、
一披露人ハ伺之通ニ而宜敷候、

（朱筆）「五四」御別紙

着城祝義之節、老共国際ニ伺書之積認置候、是ハ永き間故、代り合不苦候事、

同年九月

（朱筆）「五五」

酉九月
浜松宿次到来之節、并差立候節之儀、
書付、

浜松逗留中宿次来り候節、問屋場役人附副玄関江持参、当番之馬廻状箱受取之名面之請取、書付遣し、夫より早速状箱ハ、公用人ニ可差出候、
　但、門々無遅滞通し候様、夜中茂不手間取様可致候、
　依之逗留中、門番人不寝可申付候、
一此方ゟ宿次差立候節茂、公用人方ゟ達次第、問屋場役人附副、草籠持参、玄関江罷出、当番之馬廻へ可申達候、其節早速公用人玄関へ罷出、直問屋役人江状箱相渡差立候事、
　但、問屋場へ申遣候節、書付ニ而公用方ゟ可申遣候、其節玄

ニ付、蟄居放免之義、姉之由、酒井大学母より、上野青龍院江申出、同院ゟ願書差出候、平士又者軽き者ども共、違ひ役柄相勤メ、其筋ニ而咎申付候者ニ候得者、別而相慎可申處、右様軽卒之取計、如何ニ候、兼而親類共へ申遣置方不行届故之儀と被存候間、以後右様之儀、親類共ゟも決而不申出候様、吃度可相心得旨、小河三郎・内蔵両人立合、宅ニ而未央弥江しかと可申含置候事、

酉八月

（朱筆）「四八」

書付

此度被　仰付候大坂御城代者、青雲之要路ニ付、天運を相備候得者、自然閣老ニも可致と之儀ハ相当之筋ニ候得共、近年重き御役替も、公論計ニも無之、権門ニ而進退候分而已と相見へ、已ニ当春松平右京大夫跡内藤紀伊守被為　召候由之處、病気ニ候ハ、、次順松平周防守ニ而可然処、却而急ニ植村駿河守へ格式被　仰付候様ニ相成、其外近来順当ニ不参義、多分有之候得者、此後閣老明之節、周防守昇進、其跡へ他人等相進み、是又以手段直進之候様、聯ニ成行、大坂而已自若といたし居候而者、年数重候計ニ而、勝手向者愈以及困究難勤節ニ到り可申候、然時ハ、雲路茂半途ニ而設候訳、歎鋪事ニ候間、此上ハ一日も早く、閣老之場合ニ至り可致安心方、上策与存候付、仮令不順ニ候と茂、周防守を茂乗掛相進み候見込ニ而、猶以権門相勤メ、閣老江難進候ハ、、京師へ成と茂、転し候様いたし、年数不相掛致安心候様、可取計と存候、此段両地と茂相心得居可申候、

酉八月

（朱筆）「四九」

酉八月

絵図并次第書ニ付候書付、

浜松着城祝儀ニ付、絵図弐枚・次第書一冊遣候、無存念候ハ、、其段旅中まて可申越候、其節、此次第書も相添可申越候、増減いたし可取極候、

一彦左衛門、其者名前加へ置候得共、不罷出候哉、否茂可申越候、

一先日来り候次第書ニ、用人と有之候間、此度茂加へ遣候得共、其之外無之ハ除可申候、

一入部祝儀か着城祝義か否茂可申越候事、

右之趣、否ハ旅中迄ニ而茂可申越候、其上ニ而次第書清書可申付候、

酉八月

（朱筆）「五十」

酉八月

着城祝儀之節、宇兵衛・源左衛門心得之事、

着城祝儀之節、宇兵衛・源左衛門心得之事、

酉八月

（朱筆）「四四」

酉八月
浜松着城ニ付、郡奉行伺書ニ付、申遣候
書付、

郡奉行ゟ差出候浜松着城ニ付、相伺候書付之ヶ条共、伺之通可申付候、

右、一件留江可認置候、

酉八月

（朱筆）「四五」

酉八月
入部之節、町人・百姓其外下座之儀、
申付候書付、

此度浜松江入部之節、町・在、町人・百姓下座之義、其家之主人并忰ハ、門口雨落へ罷出、下男等之分者、家内土間ニ罷仕、平伏いたし、女子之分ハ、床上罷仕致時宜候様、兼而可申達事、

但、何茂別而行義正鋪可仕候、

一寺社其外町医等も同断、通行筋之者可相心得候、

右之趣、其筋江申達候様、且以後巡見、其外通行之節、同様可相心得旨、郡奉行へ達之事、

酉八月

（朱筆）「四六」

酉八月
浜松逗留中、寺社目見之儀、伺書之趣
申遣候書付、

浜松逗留中、寺社目見之儀、郡奉行伺之通、龍禅寺学頭、金光院外二ヶ寺任老僧・下従、国内ニ而礼申付、龍禅寺一藹密蔵院、其外ハ三之間ニ而、固之通り出礼申付候事、

一西来院者、三之間目見之初へ差出、外同様礼可申付候、

一披露人伺之通、取次方へ可申付候、

一郡奉行も加固為致出席可然哉と存候、

一三之間と入側様之処、建物建切可申、肝煎操出しハ、家中礼之通為出可申候、

一出礼肝煎ハ、目付方ニ而為致、其前之處順立等ハ、是迄仕来候者へ可申付候、

一献配ハ、中・小姓ニ可申付候、壱人抔之進物者、幾品ニ而も差出置之勝手之方へ披き可申、両人持之分ハ、表と勝手と両側へ披き可申候、

右之通ニ而入用之処計郡奉行へ申達、伺書并絵図、其外共、此度之一件へ、委細可認置候、

酉八月

（朱筆）「四七」御別紙

未央弥父二本松一介儀、先年蟄居申付置候處、此度自分昇進之儀

候事、

一十四ヶ条目、寺社目見之義、別日可申付候、在町目見之儀ハ、此度用多ニ付、不申付事、

右之趣ニ而、致評義可申達候、

（朱筆）「四一」御別紙

浜松逗留中日割

一着日

次第書之通、

一二ヶ日目

家中家替、其外礼、寺社之分礼、目見医師、其外礼可有之、

但、町人・百姓ハ無之事、

一三ヶ日目

前夕より講〻ニ而、

霊神・御社参詣、一旦帰り、直五社参詣、西来院参詣有之事、

備物等取調可相伺候、

但、諏訪参詣もいたし可然哉、

一四ヶ日目

五時頃供揃ニ而、此度異国船手当之場所并犀ヶ崖、其外天龍川辺巡見、昼ハ弁当ニ可相成候之間、取調可申候、

一五ヶ日目

発足

右之積り候得共、四日目巡見順筋、右別帳候者、三日之内へも加へ可然候、

酉七月

同年八月

（朱筆）「四二」

酉八月

役成并役替申付之儀ニ付、致評義候様、申付候書付、

給人以上役替之儀、　徳照院様　思召ニ而不残御直被　仰付ニ相成、其後当代ニ而以前之姿ニ復し、役筋ニよりて直申付、其外ハ次ニ而之申渡之積り相成候處、近比直申付之次第、以前と替り候、付而ハ役筋ニ〻差別有之も、不相当ニ付、以後者徳照院様御代之通、給人以上之分役替者、軽役共直申付ニいたし、且中小姓役之分、役儀并軽役共、次ニ而申渡、其後居間ニ而可入念旨申付候様可致と存候間、浜松江も申遣、評義之趣可申聞候、

酉八月

（朱筆）「四三」

酉八月

褥・刀掛相用候儀ニ付、書付、

此度位階昇進ニ付、以後廉立候節ハ、書院并居間共、褥并刀掛相用可申事、

御別紙

「卅九」（朱筆）　大津ゟ伺越候帳面之内

一初ヶ条目、附札之通、可相心得候、

一弐ヶ条目、伊勢路旅行ニ付在中用達之内、苗字帯刀差免候分計、大津本陣門前へ差出、三人之内ニ而可致披露候、其外領分之庄屋共ハ、通行之義ニも無之候間、不及罷出候、強而相願候ハヽ、惣代之者壱人、大津江罷出、用達一同差出披露可致事、

但、伺書ニ二字帯刀と有之ハ、苗字・帯刀之儀ニ候者、本文之通可相心得候、

一三ヶ条目、献上物可為致候、尤、旅中之義ニ付、目六（録）ニ而致披露品者、追而大坂江可差出候、

一四ヶ条目、古望仁兵衛外弐人共、昼休迄罷出候様披露ハ、前同断相心得可申候、又兵衛江茂、別段出迎致間敷旨、可申付候、

但、目見場本陣門前之事、

一五ヶ条目、御用旅行ニ付、座敷上ニ而目見等申付候儀ハ、難相成候間、用達之者共、何茂本陣門前江罷出可申候、献上物ハ勝手次第、遣し物之義、評義次第可伺候、土産と申名物者、相除可申候、

但、送り之義ハ、勝手次第、

一六ヶ条目、昼休可大津泊本陣前へ差出、蔵屋鋪出入之ものと可致披露候、三人之内披露之事、

一七ヶ条目、三人共前泊迄可罷出候ハ、玄関ニ而目見可仕候、其後、昼休ニ披露之者計罷出、其外供等ニ不及、直大津泊江罷出、用伺相済、旅宿へ引取可申候、

一九ヶ条目、玄関ニ而不及目見、町端迄先江罷出送り可申候、出入之者不及披露候、

一十二ヶ条目、惣代不及罷出候、

一十三ヶ条目、不及罷出候以□札恐悦可申上候、

一十四ヶ条目、宇野耳格外壱人義も座敷上之目見ハ、難相成候間、大津本陣前へ罷出、三人之内可致披露候、

右之外、伺之通申付可然候、猶差支候ハヽ、致評義可申事、

酉七月

「四十」（朱筆）　御別紙

浜松通行ニ付、郡奉行伺書之内、

一弐ヶ条目、郡奉行披露之事、先例之由、唐津ニ而も奉行披露之様ニ存候得共、一躰平日支配之重立候者、披露致し候而ハ、下方存込、如何ニも候間、百姓・町人之分ハ、代官披露ニ申付而ハ、如何可有之哉、寺社等之類ハ、郡奉行披露ニ而相当と存候付、評義之事、

一三ヶ条目・五ヶ条目同断、

一四ヶ条目、駕籠脇ゟ披露者不相当ニ付、是又代官ニ可申付候、

一七ヶ条目、時宜次第ニ可有之、何れも伺之通可申付候、

一十三ヶ条目、町医目見之儀、別日ニ可申付候間、当日ハ不及罷出

限等五ヶ年と茂いたし、永年季無見分之儀ハ、相止メ可申候、且又、此度村方より之出書付ニ、畑田成・田畑成と認差出ハ、評議書ニも同様相認メ候得共、右ニ而者紛敷候、定例之通、田ゟ畑ニ成候分ハ、田成り畑与申、畑ゟ田ニ成候分ハ、畑成田と相唱へ可申候、村方より之申出ハ、不拘役所々々ニ而、追々改メ唱候之様、可申渡置候、

酉五月

同年七月

（朱筆）「卅八」

酉七月
異国船手当再評義之儀ニ付、
申遣候書付、

異国船手当ニ付、再評儀之趣ニ付、左之通、

一郡奉行再評義之ヶ条、評議之通ニ而可然候、

一目付方之儀、足軽番之義ハ、評義之通、百姓之内ゟ苗字・帯刀差免、一ヶ所三人ツヽ可申付候、又者小普請故、足軽等之不用者を、三人ツヽ遣し置可申哉、老共評義之上、直取極可申付候、

一同断着服之義者、小袴・陣羽織と相定可申候、

一同断白羽村一ヶ所者、相省き可然候、目付評義之通、石火矢台計可設置候、

一吟味役之方、着服前同断、壱ヶ所之出張場へ不残集り候者、時宜次第ニ而、先ハ別段後詰可申付含ニ候間、此義老共可有差略候、右之外者、初之評義先日極候處者取用ひ、再応之方ハ、前件之通ニ而、此後相極候間、一件帳江能々留置可申事、

酉七月

（朱筆）「卅七」

酉七月
御役成ニ付、為祝儀大赦宥申付儀、
申遣候書付、

此度大坂御城代被　仰付候ニ付、為祝義大赦宥申付候間、仕置咎等ニ相成候、士軽之内、十年以上之分、取調可相伺、

但、出奔者ハ可除之、

一在町寺社等、郡奉行方ニ而取扱候分も、五年以上取調可相伺旨、郡奉行へ可申達候、

酉七月

（朱筆）「卅八」

酉
七月

郡奉行境目迄罷出候節、并門番・者頭防等、都而者頭以上及筋目見之節者、駕脇之者披露可為致事、

但、家老并年寄隠居ハ、不及披露、

右着発計ニも無之、平常とも以後相改候事、

酉七月

右之心得ニ而、人数弓之評義取違ひ、無之様申含、今一応可為評義候、

右之趣、猶又申遣候間、評義茂申付、何ニも致勘弁所置可有之候、

酉五月

御別紙

異国船手当ニ付、此方ゟ申遣候書付、并役々ゟ差出候評義書、其外書付類并往返自筆之趣、一々浜松当番所江書留置候様可申遣候事、

（朱筆）「卅四」

酉五月

遠見番之儀ニ付、注進等之儀、申遣候書付、

浜辺村々江異船漂着之義ニ付申送、并此度別段申付候趣、代官ゟ之書付面々ニ而ハ、小沢渡村外十九ヶ村共、兼而遠見相心得、手当米も遣置候由ニ候上ハ、此度愈以無油断相勤可申、注進等之儀者、手記無之由ニ付、即刻浜松へ申通候様、此度主法相立可相伺候様、代官江可申達候事、

酉五月

「同年五月、御勝手方へ被渡下、」（朱筆）

（朱筆）「卅五」

酉五月

村々永年季居免、鍬下等願之儀ニ付、申遣候書付、

上飯田村外拾ヶ村田畑鍬下年季明ニ付、出精之上加免いたし、此上居免相願候ニ付、郡奉行地方代官評義之趣一覧いたし候處、相当之評義と茂不相聞候、依之致勘弁候處　公儀御定之趣ニ而者、新田開発後茂鍬下ハ三ヶ年ニ限り候事ニ而、荒地等之鍬下ハ、猶更見取伺様ニ、多分相成候事之由ニ候得者、居免等是迄仕来ニ候とも、以後ハ相改可申候間、此度無見分居免願之趣ハ、不及沙汰、乍然以勘弁当年見分之義ハ、差免三ヶ年之間鍬下ニ申付、加免之分ハ差出可申候、万一加免之儀、右ニ而難渋ニも候ハヽ、当年改而被見分相当之取固相付ヶ、年限之義ハ、三ヶ年と取極可申事、

但、見分雑費難渋之趣ハ、取上不申事、

右之通ニ付、以後何れ之村方ゟ願候と茂、切替之節ハ三ヶ年ゟ以上ニハ申付間敷候、加免等願出いたし候分ハ格別、左茂無之分ハ、切替之時ニ是非見分之上、加免可申付事、依之承付左之通、

書面永年季居免之儀ハ、難成候加免もいたし候事故、当年見分之處者差免、三ヶ年之間定免鍬下等可申付旨、

一永田村外弐拾九ヶ村、畑方鍬下免下等之儀、年限之義も前書ニ見合可申渡候、

一白羽村外五ヶ村、新開場鍬下之儀、同断、

右之趣、差支も無之候ハヽ可申付候、万一不落付筋ニ候ハヽ、年

八ヶ条目
九ヶ条目
一月持等ニ相成候而ハ、余り苛政ニ而如何敷、矢張一年持ニいたし、
若シ他行等之儀ニ付、存寄も候ハヽ、別段可伺候、
十ヶ条目
一評儀次第ニ而可然可申付候、

吟味役評義之内

初ヶ条目
二ヶ条目
一番足軽之趣意取違、評議いたし候趣と相見へ候間、前書之筋申聞
可然事、
三ヶ条目
一郡奉行評義之趣と同様、模様次第山見を可遣候、
四ヶ条目
一目付方評議之趣茂有之候間、追而一決之上、可取計事、
五ヶ条目
一評義之通、木筒ハ相止候、可減切ニ而可然候、
六ヶ条目
一出張野陣等之儀、評義之通ニ而可然候、
七ヶ条目
一出張着服之儀、別ニ申遣候事、
八ヶ条目
一評義之通可然候、
九ヶ条目
一注進之儀、番人ゟ壱人罷越し等（本ノマヽ）之義、前書之通り番人之趣意、取
違ひ之事故不被用候、
十ヶ条目
一出張場所之儀、目付方評義之處ニ而、差略可有之候、
右之外、評議之通ニ而可然候、猶勘弁いたし可申付候、只々頭勝
ニ相成、元之處不居候而ハ、永久之計ニハ無之候間、右之処能々
取捨有之、且ハ不益之筋無之様可有差図候事、

西五月

（朱筆）「卅三」

西五月
着服之儀、足軽番之儀申遣候書付、

一出張人数着服之義、小襠陣羽織之方可宜候得共、出張中其侭罷在
候而ハ、却而迷惑之節ニも可致哉、出張候とて必戦争ニ可及と茂難
申、又一ヶ所江来リ候と茂、外三ヶ所も出張可申事ニ候間、固メ
耳之場所ハ、日々専勝計ニ付、是等をも勘考、出張之節計ニ無之
場所詰中事実ニ引当、評義いたし候様、且又勘弁之趣茂可申越候、
一足軽番人之義ハ、異船見掛次第相払、并上陸いたし候ハヽ、血戦
ニも可及事第一ニ而、注進等之義ハ村方へ申付置、足軽之方ハ、

第即刻出張之事故、近在等ゟ寄集リ候様ニ而者、問ニ合申間鋪哉、
却而右出張ハ、即刻之義ニ付、其節何人・何疋ハ入用候間、市中・
在中ニ不限、一刻茂早々欠参可申候間、市在へ申付置候方可然哉、
兼而割当等ニ而間ニも合、平日役宅と不便之義無之候ハヽ、伺之
通ニ而も可然候、

二ヶ条目

一番小屋之儀、場所ニより、高引等相成候而も、致方無之候、乍然
海面之番小屋ニ候間、成丈海岸出し取建可申事、

三ヶ条目

一評儀之通ニ而可然候、

四ヶ条目

一人足遣方等之儀者、平生之義共違ひ　公儀御用之事ニ付、少々
難儀いたし候而も不苦候間、其心得ニ而手当も遣候事ニ候ハヽ、
少々宛者遣候而も可然候、

五ヶ条目之内、

一村方防申付候義、評義之通ニ而も可然候、

一石火矢台之儀者、先当時見合、追而可申付、此度ハ土俵ニ而可試
候、

一尾州・能州鷹打場之義ニ付、兼而取建物等可申付段被懸合置可然
候間、其趣可取計候、

一山見遣ひ候事ハ、模様次第ニ而可然候、

目付評義書

初ヶ条目

一石火矢台之義、前文之通、

一足軽番人之義ハ、別ニ申遣候事、

二ヶ条目

三ヶ条目

一評義之通可然候、

四ヶ条目

一着服之儀、唐津之振ニ而申付候得共、評義之趣も有之候間、別ニ
申遣候、

五ヶ条目

一白羽村一ヶ所止之義、手当次第ニ而止候而茂可然哉、一躰足軽番
之義ハ、異船見届計之儀ニハ無之、上陸等不致候様見掛次第、石
火矢等ニ而打払、上陸もいたし候得者、血戦ニも可及と申訳ニ而、
一躰之遠見番ハ、魚見等へ申付、足軽ハ石火矢、其外人数出張迄
之処、防方相勤候事ニ付、右之心得ニ而評義無之而ハ、筋違可申、
三手とも ニ右を申含候事実相当評義可申付候、

六ヶ条目

一小屋之義、成丈ヶ海岸江出シ可取建候、

七ヶ条目

一農民江申付置候ハ、防方第一ニ而、銘々場所を以相防可申、強而
何と取極ニも及申間敷候、

一平日四ヶ所へ、足軽位ニ而も附置候ハヽ、手ころ之鉄炮玉果茂、人数丈ヶ渡置可申候、小頭等茂補理候方ニも可有之哉、

一右火矢者有間布候間、木筒ニ而も借用ひ置可申哉、

一注進有之候ハヽ、四ヶ所ニも追々可出候得共、先抔前之人数第一ニ駈付可申事、場所ニ而有余之事茂候ハヽ、村方農家等を旅宿ニ取計ひ可申候、喰事・入湯等之義ハ、万事村方へ差懸り可為出事、

一出張之もの共、着具之儀、於場所模様ニより、甲冑茂帯し可申候、途中之儀者、唐津出張之節者、馬乗羽織・野袴・踏込等ニ相見候得共、此度ハ直着刻次第、はたらきニも成候事可有之ニ付、士以上之分ハ、不残馬乗羽織立附着用、組之者共ハ、服引・看板羽織、小役人之分ハ、立付股引等有合之分、勝手次第ニ相用ひ、先年之趣ニ而、看板羽織等も可為着、此外渡し物等見計可取計候、尤、出張心得之者ハ、平日渡置可申事、

但、先年之帳面ニ、絵師頭、医者・坊主、台所手代ハ、具足無之候、此度ハ、具足も其節ニ臨み渡候積り可致候、

一本文渡物者具足之外、渡置可然候、又具足も自分背負可越候様之手続ニ致し候ハヽ、兼而渡置候とも可然候事実相当可取計候事、

一平日台場へ足軽等置候事ニ相成候ハヽ、具足其外附属之物可渡置候、足軽者出張相心得居候者頭組ゟ申付哉、月代りとか半年代りとか可交代為致可申事、

一場所へ為詰置候足軽、平日閑暇ニ而も如何ニ付、何之手業ニ而茂申付候様、可有勘弁事、

一台場等拵候節者、先年達ハ不相用、炮術役之者、股引等野装束ニ而、指揮為致不苦候事、

一都而此度之手当ハ、平生不怠方第一ニ而、成丈ヶ手軽ニいたし、存念書ニも申上候通、其村方之者抔へ、篤と申含、愈々防方之工夫・鍛練為致候様、可取計事、

一別紙取調書ニ申越候内、四ヶ所へ之筒割者、平日廻り居候事と存候、

一同所書付之内、出張役之者ハ、年々代合可申事と存候、

右之外、追々心付候儀ハ、伺茂可申越候、又者差掛り此度可申出事ハ、其地ニ而評義之上可申渡候事、

西四月

同年五月

（朱筆）「卅二」

西五月
異国船手当、三手評義書ヶ条之儀ニ付、
申遣候書付、

異国船手当之義ニ付、役之評義書之趣致一覧候處、猶又存寄茂有之候間、左之通申遣候、

郡奉行評議之内、

初ヶ条

一人馬兼而割当之儀、市中位ニ而相済候ハヽ、宜敷候得共、注進次

然事、

申十一月

「同御別紙」（朱筆）

「廿八」（朱筆）用達之儀ハ、郡方并吟味役評儀之通、自此節申出候節ハ、却而不穏方ニ可有之候間、先相見合、其内昇進等之儀茂有之ハ、其節ハ早速可申出候、郡奉行評議之裏印金之方可然哉、且、近江之義等ハ、猶其時ニ臨み、何とか評義可有之候間、二冊とも当番所へ留置き、此節申出候義ハ、見合候旨、両役向へ可申達事、

右之趣、浜松へ可申遣候、

同年十二月

「廿九」（朱筆）川澄兵右衛門義、賄賂一件、猶目付方糺中ニ候得共、其調之模様ニより、下方糺等いたし候様ニも可相成哉、左候得者、別而其心得ニ而可取調事と存候間、其段可然可申達旨可申遣候事、

「〇」（朱筆）同八年酉正月

「三十」（朱筆）

酉正月
士分軽輩縁組不致義ニ付、尋候書付、

家中士分之者共、寺社并百姓等ゟ者、縁組茂いたし候得共、軽輩共と縁組不致訳ハ、何之元極りニ而茂有之哉、穿鑿いたし、且目付と茂方をも相尋可申越、

右之趣、浜松江可申遣候、

酉正月

同年四月

「卅一」（朱筆）

酉四月
異国船手当、領分海辺出張之儀申越候ニ付、勘弁之趣申遣候書付、

異国船手当、領分海辺附四ヶ所へ出張之儀ニ付、取調書付致一覧、猶勘弁之趣左之通申遣候、

一出張人数書調之通ニ而可宜候、三ヶ所共歩横目賄壱人ツ、穀取、代官・手代も壱人ツ、、都合弐人ツ、増可申付候、

一出張之義、唐津表ニ而魯西亜之節、手当帳面之趣ニ而ハ、其場所へ詰切と相見へ申候処、此度異国船御手当之御趣意者、今年而已ニも無之、永々之訳故、小人数なから、出張詰切ニ而ハ、人数も迷惑いたし、費用も不少、無限事ニ付、先日遣候内々存念書上之趣をも見合、平日者石火矢台場取建、足軽位之者か、其以下ニ而も心得候者両・三人も附置、異船見請候か、陸地へ端船等来候趣ニも候ハ、、村方へ申付、急注進ニ而、右出張心得之者相詰候様いたし可然哉、

達候儀も有之様被存候、以後者、其都度々々認直し可相渡旨、浜松へ可申遣候、

申八月

文政七年申閏八月、御勝手方江被成下、

（朱筆）「廿六」

申閏八月
勝手方并吟味役、江戸江年々勤番之義ニ付、書付、

先日、樋口十郎兵衛ゟ差出候書付之趣、隨分尤ニ存候間、以後吟味役勤番為致候方可然旨申遣候處、主法不相立内者、無益之事と存候旨申越候、主法付候後、来ル者取計方越見物いたし候耳ニ而、相詰候益も無之候、主法与申而茂、中々一旦ニ者不付儀ニ而、已ニ此間茂外見合之義有之、文化十一年之入用帳と、当時之入用と調させ候處、昨年之處ニ而さへ四分一之入用ニ相成居候、右者、一旦ニ減候訳ニ無之、漸々心付候故、如此減ニ到り候事ニ候得者、此度迚も主法申付へき程ハ、追々訳付候得共、其侭ニ持こらへ候而已ニ而ハ不行届、始終無断操廻し、心付不申候而者、不相成儀ニ有之、且ハ主法之付ヶ方越茂見及ひ、俱ニ評論等いたし候得者、格別心得方ニも相成候義ニ付、矢張此節ゟ浜松吟味役、両人勤番いたし、此方之軽済向重ニ引受、来年交代之時節迄ニ、夫々取計之品を付ヶ代り之者へ引渡、猶明年ゟ代り之者引受、明後年代り合之節、前年之通いたし、年々引送り候ハヽ、送金之都合ニ而、初め万端可然、十郎兵衛書面ニも有之通、江戸者ハ江戸之振合を考合、彼是酌酌ニ而、在所ニ而之見込程減方不相成と申も、他ゟ見候處ニ而ハ、左も可有之義、旁右之通、吟味役詰切致、差略候ハヽ、此上存外之減方も致出来可申と存候間、何れ当時ゟ両人も勤番いたし、万端相談をとけ、専取計方可然、且勝手方茂、壱人定書分勤番いたし候ハヽ、吟味役計ニ而不行届候處之取計茂致出来、是又可然与存候、右之通ニいたし、両・三年も相立候ハヽ、篤と主法立可申候、其上者専法而已之儀ニ付、是迄之通、勤番等無之とも、宜鋪存候事、

右之趣、致評義無存念候ハヽ、可申遣候、

申閏八月

「同年十一月」（朱筆）

（朱筆）「廿七」

申十一月
江戸扶持米金送之方、益有無ニ評義之儀ニ付、申遣候書付、

江戸扶持米金送之方、益有無之儀ニ付、吟味役共評義書致一覧候處、尤之論ニ有之、且、先達而銀送相止メ、米送ニ相究節、右様度々差配変り候而ハ、筋も難立候間、銀送相止メ候上ハ、此後又々不動候様ニも、突留候上ニ而之米送ニ候得者、又、此度金送ニ相成候而者、何分趣意も不相通、其上評儀之趣ニ而茂、米方ハ遣都合ニも相成候趣、旁評義之通、米送ニ取極置可申旨、吟味役江達置可

渡、尤、代官ハ、郡奉行ゟ相渡可然事、

一評儀書之書法無之候故、此度之如きもの、地方役ゟ申立之趣意、一々不相分、且扶持方遣取りニ而、見合ニも不相成候間、先日、遣し候間　公儀評議取調書写も有之候ハヽ、右越此度申達置候向へ、兼而為見置、以後評義等之節、書法右ニ見習可認旨可申付置事、

右之趣相含可然可取計、前書之外、不分義も候ハヽ、相伺可申候、

申七月

（朱筆）「廿三」

申七月
諸役評議書取扱方之儀ニ付、申遣候
書付、

諸役評義取調書と茂、此地ゟ相返し候者、老共手元江仕廻置可申候、此度如き地方役ゟ差出し候書付を、添置可申候、都而出書付と一緒之物ハ、不分様可致置事、

申七月

同年八月

（朱筆）「廿四」

申八月
差扣伺候儀ニ付、相定候書付、

勤向ニ付、不調法有之差扣伺候節者、其役所詰所ニ扣居、以同勤相伺、挨拶次第宅江引取可慎在候、

一右伺之節、当番老出殿中ニ候ハヽ、即刻相伺、退出後ニ候ハヽ、翌日当番老出殿後可相伺候、夫迄者、常之通相勤可罷在事、

但、在府中者、在所之方老共、日々不致出殿、宅ニ而当番心得居候得共、在城中出殿之刻限茂有之候間、朝五半時ゟ九時迄と相心得、其後者翌日之伺可致候、且勤ニ無之分ハ、宅ニ扣居、伺可申候、

一会日等ニ而、老共出殿中者、如本文可相心得候、

一勤向之儀ニ付、差扣伺之上、尤之旨挨拶有之候とも、諸親類差扣伺候ニ不及候、

一都而叱り以上之咎之節者、直宅江引取、当番老出殿之有無、并刻限等ニも不拘、即刻以同勤差扣相伺、諸親類茂同様之事、

右之通、以来可相心得候事、

申八月

別紙支茂無之、存寄も無之候ハヽ、惣体江可触置候、浜松ニ而茂触候様可致候、

（朱筆）「廿五」

平助江

直書付并仕置下知書等ハ、老共迄遣候儀ニ付、諸役人江相達候節者、老共ゟ申達候文語ニ認直し可申渡事、

右之通、是まて取計候事と存候処、尽此方より書付遣候成りニ相

別紙承付之書面ハ、浜松老共方へ仕廻置候様可申達候、以後とも不及差越候事、

同年七月

（朱筆）「二十」

申七月
書付類、帳冊・半切之差別之儀、申遣候書付、

諸役ゟ差出ハ、伺書・評義書、其外都而書付類、紙数三枚以上ニ相成候分ハ、帳面ニ可致、右枚数ゟ以下之分ハ、半切ニ而認可差出候、

但、吟味伺書ハ、格別之事、

右之趣、諸役人江可申達置候、猶不審之儀、申出候ハヽ、可伺越候、

申七月

（朱筆）「廿一」

申七月
留守中飛脚到来ニ付、用召申附等之儀ニ付、書付、

両地とも、留守中飛脚到来之節、同席へ廻し之儀ハ、先日相極候通、連状并連状（ママ）并別紙計、即刻相廻し、自筆并其外之書付類ハ持出、銘々可致一覧候、出殿之義ハ、飛脚到着之刻限次第、是又先日相極候通之事、

一右同断用召之者有之節者、前日・即日呼出之分共、自筆一覧之翌日、申渡可取計候、

但、飛脚到着之刻限ニゟ、今日到着候而、翌日自筆一覧、翌々日用召人申渡ニ相成候事、

右之通ニ而、差支も無之候ハヽ、相極置候趣可致事、

申七月

（朱筆）「廿二」

申七月
諸役評義之儀ニ付、申遣候書付、

金折村庄屋、賞評義書致一覧候處、初而之義、旁隨分宜鋪候得共、郡奉行評義之趣者、浮き候文意ニ而しかと取極候趣意ニ無之不宜、且、差支之有無而已評儀候儀ニも無之、一体之処を致評議候事ニ有之候、代官之評議者、至極よろしく候、吟味役之評義ハ、勝手用達之廉ニ無之故、無構と申ハ筋違ニ而、勝手用ニ拘り候儀ニ者無之、扶持方等遣候ハ、入用ニ拘り候義ニ付、不否致致（ママ）評義候儀ニ而、此度之如き評義ハ、以後と茂無間違様可致事、

一評議申付候ニハ、如今度茂矢張地方役ゟ差出候書付越、評義申付候役向江相渡、此中誰々之處、致評義可申聞旨可申達、右書付ハ、其役ニ而仮ニ写取為返候而、又外役江相渡可申、一役限之評義ニ候ハヽ、渡候書付ハ、評議書差出候節、添而出候様可申達、渡候書付、役人同士之廻しニハ不致、一々老共へ取返し候而、夫々可相

「十六」（朱筆）御別紙

便着之節、廻し方之事、

一用召ニ而申渡者之前日・即日之事、

右等之處、此度改メ候様、委敷取調候而認可差出候事、

同年六月

「十七」（朱筆）

申六月
書付

小河三郎出立後者、宇兵衛・内蔵、両人殊ニ年若ニ而改事向、格別心能念を入候故哉、政事向之義并役替等之儀も、目付江品ニより致相談候様ニ、自筆ニ相見申候、全く心能いたし、不恙無之為メ、念を入候事ニ候得共、兼而目付共ゟハ、政事向之義、其外不拘事、彼是与申たかり居候處江相尋候得者、気受ハ可有候得共、政事向相談受候様ニ、目付方ニ而心得候得者、老共役威も減し、目付共方ニ而ハ、能き事ニいたし付ヶあかり可申と、深く相考候、両人共年若之義、小河三郎出立儀者、格別ニ心配いたし候段ハ、此方ニ而茂、隨分察居候事、并目付方ゟ此方ハ、内輪之事ニ候間、此後とも申談難決義ハ、矢張其趣申越、又ハ不行届と存候儀も候ハヽ、是又無伏臓（腹）其趣其侭申越候様可致候、自筆等ニ而不決之義申越候ハ、如何と存候事ニ可有之候得共、必其掛念ハ無之、有侭ニ申越候方、表江不顕与而之有候間、此段心得ニ程能可申遣事、右者、両人共別而心配いたし、入念候様子ニ候間、猶無益ニ心配無之様、前書之通申遣度候、目付者表向ニ而、此方ハ同役并自分共ニ、内幕之事故、如何様ニ而茂不発内ハ宜敷候間、此後も右様懸念無之様可致、乍然、差掛り速ニ取計可申義、決し兼候事盤、無致方候間、入念候方へ付ヶ、其節限目付へ申談候而、取計候も不苦候間、此段等茂、程能可申置候事、

申六月

「十八」（朱筆）

申六月
用召之者呼出方并刻限之儀ニ付書付、

用召之者、呼出之義、前日・当日之差別無之由ニ付、以来役替之類・願済之類、存寄有之、役義差免等之類、其外常体之儀者、前日呼出、叱り以上咎付候分ハ、当日呼出可申、刻限之義も、左之通可取極候、

一直申付候分ハ、其日老共出殿ゟ、半時前之呼出、

一次ニ而申渡候類ハ、老共出殿と同刻之呼出、

右之通ニ而、差支無之候ハヽ、以来可相改候、

申六月

「十九」（朱筆）御別紙

（朱筆）「十四」

申五月
用召之儀ニ付、相尋候書付、

先月十八日、岩本恵介用向ニ而呼出候處、遠足いたし遅刻之旨、右者弐男事急養子跡目之申渡ニ呼出候事と被存候、右様之義ニ而茂、即刻呼出候哉、又者善悪ニ〆前日・即日之差別茂有之候哉、右之差別可申越事、

申五月

（朱筆）「十五」

申五月
評義取調之儀ニ付、役々江可申達趣意之儀書付、

目付江

表向規格ニ拘り候儀、其外共品ニより、以来取調評義等可申付候間、先例・先格等相糺、或ハ其時宜ニより勘弁を加へ、取調評義共、書面ニいたし可差出候、

右者取調、評義等之趣、書面ニいたし差出候得者、直入一覧取捨之上、差図有之事ニ而、其事ニ取調、又者評儀等之通り、必相済候筋ニ者無之候間、右之趣も、兼而相心得居可申事、

但、本文取調之儀ハ、風聞等相糺候、調方之義ニ者無之、評義より軽き品ニ付、取調申付事ニ而、其役之見込申上候事ニ候、

申五月

吟味役江

入用筋ニ拘り候義、品ニより以来取調、評議等可申付候間、先例・先格等可相糺、或ハ其時宜ニより、勘弁を加へ、取調評儀共、書面ニいたし可差出候、

右者取調、評義等之趣、口演而已ニ而言上候而ハ、不行届義も有之間、以来書面ニいたし差出候得者、直入一覧、其役之存念委鋪承知いたし、取捨之上差図有之事ニ而、其事ニ取調、又者評議之通り、必相済候筋ニ者無之候間、右之儀茂、兼而心得可申事、

申五月

郡奉行
地方役
普請奉行
勘定奉行
代官
其外可然役向

右之分、前書吟味役江達之趣ニ準し可達置事、

但、目付初一役限、一通り書付相達置候様致し可申哉、口達ニ而も可然方ニ可取極候、両地とも同様可致候、

申五月

（朱筆）「十二」

申四月
急養子願書差出方并見届等之儀ニ付、
諸士心得ニ可相達書付、

急養子判元見届之儀、是迄ハ口上ニ而申出候得共、以来者判元見届之義、当人之印書ニ致し、重立候親類共より目付江可致直達事、

一判元見届として、目付共相越候節、諸親類并養子ニ可相願者茂相詰居、迎送り可致候、

一養子願書ハ、重立候親類ゟ目付江入被見、無存念候ハヽ、判元見届請候上、右願書ハ直目付へ可差出候、

一遺し方ニ而者、右判元見届相済候由承り、直願書ハ、当番老江可差出候、

一病者之儀ハ、縦ひ重病ニ候と茂、服薬之手当次第ニ而ハ、一両日ハ有候物ニ候處、是迄判元見届之手続茂、万事周章、時ニより夜中ニもかゝり候事有之、自然不行届茂有間敷とも、難申一件判元見届ハ、不軽儀ニ付、隨分入念可申、依之以後盤、書類申出候分ハ、即日見届ニ相成、昼後申出候分ハ、翌日之見届ニ相成候事、

右之通申付候間、以後別而入念候処、可相心得事、

申四月

（朱筆）「十三」

申四月
書付

家中二男ニ而呼出候者、給人以上ニ取立候分ハ、是迄之通養子可申付、無足ニ而実子無之分者、以来養子不申付事、

一軽輩共義も、惣領と庶子ハ差別可有之事ニ候處、是迄惣領ハ致別家候様ニ相心得、末男之方へ親共掛り候族茂有之哉ニ候、勝手つくニ而子供之内江掛り候者、時宜次第ニ候得共、一体之家筋者惣領之方ニ而可致相請事と可相心得、并次男之分ハ養子不相成候事、

一軽輩共忌服之義、前々ゟ日数差略茂有之趣ニ候得共、忌服之義ハ人道之条理ニ候得者、以来者定式之通相受ヶ、奉公向ハ差免無之内者、致遠慮、自分用之義ハ頭支配等へ届置、勝手次第相弁可申事、

右之通、此度申付候事、

申四月

右之趣、無存念候ハヽ、両地共可相触、軽輩二ヶ条ニも、右之通是迄之仕来と存候間、今度改メ候積りニ候間、其心得ニ可有差略候事、

同年五月

共限裁断ニ而、内輪之筋合不存故か、目付共初諸役ニも品ニより、政事向之義を致批判、老共又老主人之儀をも唱候次第、役人ニ者有間鋪義、不恙之致ニ候間、評義等を申付候ハヽ、聊穏加之姿可相成哉と存候、勿論評議等申付候而茂、一々其通取計候事ニ候、決而無之無余義筋も候ハヽ、其訳を相達、評義と行違取計可申事、右之趣、何茂存念有無ニ〆、評義等之儀ハ、猶又達方等可致勘弁と存候事、

申三月十一日

（朱筆）「十」

書付稿

寄合小普請申付候上者、有職散官無勤之差別可有之事ニ付、取扱之規格相立、当時迄取計成候處、差支之筋茂不相見候間、愈以規格之通取計可申候、依而ハ右規格有之趣ハ、兼而家中ニ而茂心得居可申事、

一役儀年来相勤候者、又者見出ニ而軽役等申付候者、一時抜群之勤労有之者茂、是迄賞方不行届候様ニ存、不本意之事ニ候、以来者其勤ニより、時々新知加増等茂可遣候間、役義相勤候面々ハ、別而可致精勤、番方其方ニ而も、無油断撰挙ニ預り、役義相勤候様、可心得事、

右之通、逐々可申聞置事、

同年四月

（朱筆）「十一」

申四月

急養子判元見届之儀ニ付、手続相改メ候趣、目付共へ可達書付、

急養子判元見届之儀、近来区々ニ相成候由、以後ハ養子願人〆、判元見届呉候様、印書ニ致し、以親類目付共江可差出、目付共様子相糺、無存念候ハヽ、書付請取置、順番之目付〆前書之次第、老共へ申達、時刻次第願人等へ罷越可申、其節、諸親類并養子ニ可相成者茂相詰居致出退、座敷江通候上、重立候親類〆養子願書差出、目付致一覧、無存念候間、調印可為致旨申達、病間へ罷越、判元見届手添等如例可有之、右願書最初之親類〆目付前へ差出、一覧之上判元無相違見届、願書請取候段申達、願書抔之退散詰合之者、如初相違可申、右願書ハ、直当番老之宅へ致持参可差出候、

一判元見届候書付類差出候而、昼後為見届可罷越候、昼後、願出候分ハ、翌朝、老共へ申達、其昼後、為見届可罷越候事、

右之通、此度相改候様申付候上者、元文・延享・宝暦・文化之度ニ相達候手続ハ、以後不相用候事、

申四月

右之趣書取、両地目付共へ可申達候、

之中央ニ而、万事政道流行ニ無擬溜様取計第一ニ而、万事ニ上へ同意し、下之右意之方へ、同意ハ不致役筋ニ候處、政道を茂不弁、其職耳ニ而申出候、吟味役抔申立ニ限を、一応再応之懸合も無之、下ゟおたてられしまゝニ而、趣意等申越候者、軽卒之儀ニ而、右様之書面ニ而ハ、却而行違も出来可申、以後前書之趣を相心得取計候者、可然候事と存候、

右之趣、小河三郎方へ申遣、以後右様不審之義ハ、相互ニ幾度茂往返いたし、下方不審之不起様、可取計候事、

申三月

（朱筆）「同」

（朱筆）「八」

省略筋之儀、及差図候前後不申越儀ニ付、申遣候書付、

普請奉行ゟ省略ニ付、七ヶ条伺差出候、夫々附札を以申渡、諸向江茂申渡候由、右者如此伺出候付、附札之通可及差図旨申越候而も可然處、無其義、其上諸向江茂達候義ニ候者、猶更可申越処、如何之手続ニ候哉、右之趣、浜松へ可申遣候、

（朱筆）「九」

申三月

諸役ニ而評義事可申付と存候儀ニ付、書付、

政事向取計之品ニより、折々目付吟味役共等ニ而不審敷存候事茂有之様ニ被察候、右者全く内輪ニ無余義筋有之取計候事茂、表ゟ発候處ニ而ハ、内輪之姿ハ無之間、自然彼是疑惑をも生し可申、依之致勘弁候處　公儀ニ而も其役々ニ而、夫々評義も被　仰付候上、御取捨有之事ニ候間、以後自家ニ而茂其品ニより、其役筋江評義申付致取捨候ハ、、其役筋ニ而も、其事之理合を茂致合点、自ら疑惑之筋茂少く相成候場合ニ到り、平生之浮説を防候筋ニも可相成、且者政事向、念之(を)入候姿ニ相見へ、并万一取計之内、行違出来候と茂、評義通候相済候義ハ、致評義ハ役之不念ニ相成候得者、取扱候老共之名前も不汚、聊寛心之筋ニ可有之哉と存、旁以評儀之右体、左之通可取極置哉と存候、

一目付共方ニ而、兼而規格之様ニ相心得居候事ニ付候義ハ、品ニより、目付方ニ而評義、又者取調可申付候、

一入用向ニ付、臨時又ハ新規之儀ハ、品ニゟ吟味役ニ而評義并取調可申付候、

一仕置筋ニ付候儀ハ、品ニより郡奉行方ニ而、評議并取調可申付候、

一在町ニ付候儀、品ニより郡奉行又者代官ニ而評義、并取調可申付候、

一地方ニ付候義、品ニより地方役ニ而同断、

一此外品ニより、其役筋江評義取調等可申付、

一重立候儀入込候義、跡へ残し置見合ニも可相成分ハ、多分評義ニ申付、其時限之軽き品ハ取調候方ニ可申付候、

右者是迄品ニゟ、其役筋之存念等承候儀も有之候得共、多分ハ老

（朱筆）「六」

申三月
家中咎申渡句〻之儀ニ付、
書取、

家中江咎申渡之句〻、以来左之通、

叱リ急度叱リハ、
不調法之儀、
不行届之義、
不恙之義、
差扣ハ、
不調法至極、
不行届之到、
不恙之到、
不埒之儀、
閉門ハ、
不埒至極、
不届之儀、
蟄居暇等ハ、
不届至極、
右之通、相定可申事、

申三月

「同年三月、御勝手方へ被成下」（朱筆）

（朱筆）「七」

彦右衛門
平　助

日光御用掛りニ付、手当之積講之義、掛合無之迚、吟味役共不承知申出、小河三郎ニ茂同様不承知之由ニ而、彦右衛門・平助迄趣意申越候書面致一覧候處、一件軽済向之義ハ、彼我之無差別、彼之不足ハ是ニ而稠、是ハ彼ニ而補候心得ニて、右相勤候上ゟ、右御用大金茂、中々彼地ニ而ハ引受難出来、殊ニ江戸ニ而借入賄候中故、新借引出等之手段ニも相企、已ニ当時ニ到リ講懸金ゟハ、右連中ゟ出金之方多高ニ而、一廉之防ハはたらき成候處ニ而、彼地ゟ之運送も、夫丈ハ同類居候姿ニ有之候得者、右様之訳合をも相糺、其上ニも不審之儀ハ穏ニ可相掛合越候處、無其儀、一旦ニ怒気を含候耳之書面ニ而、已ニ昨年吟味役共文通之内、趣意書取兼行違、彼地ゟ存意申越候節茂、直書ニ而、当地ハ一体之義、聊之義ニ而隔失ニ相成者、不恙之旨申遣候事茂有之處、右之申付ニも相触れ候、其上吟味役抔者、軽時耳越取扱候者ニ而、一体之政態者不相弁候間、一途ニ不承知等申出候も、尤之儀ニ候得共、尤、役之義者、軽済専ら之内ニも、政態を不取失候様執上第一ニ而、常々上下之中央ニ居之上ニ取りてハ、羽翼となり、下ニ取りてハ、父母ニなりて上候を専らに輔佐し、善あらハ其上ニも潤色し、不善あらハ、其不善越掩て善事ニ近ずけて、下ニ発し、下ニ臨候ハ、子を扱るやう庶子夫々ニ、各官之事、各意ニ申出候時者、総能き事ハ少きものニ候得者、其短き延し、長きハ短くして上江通し、都而上下

候と茂、夫迄之事ニ而、強而其力量者不分候ニ付　公儀文学高下御撰之通り、折々ハ弁書申付候ハヽ、文学者之励ニも相成、其内実ニ学業よろしき分へハ、褒賞等茂有之候ハヽ、格別と存候間、別紙・弁書四冊遣候、是者久次郎・権兵衛之方者、聖堂并若年寄宅ニ而相認候、拾助元譲者右を見習ハせ、宅ニ而為認申候間、権兵衛之弁書越形ニいたし、当時相応之学者へ弁書可申付候、授読・副授読等者、何茂勿論出来可申候、見分之節講義相勉候跡茂、過半ハ出来可申哉ニ存候間、其心得ニ而可申付候、勿論新太郎江茂打合、同人義者上之方江付候而、学者を撰ひ候心得ニ無之而、学者之方へ付出、相談又者助言直し、加筆等致し遣し候而者、無益之事ニ付、縦ひ不出来ハ不出来形リニ而よろしく、併、弁書も可致と申程之者ニ候得者、まさか不分事ハ有之間敷、解ちかひ等者、則其者之力量顕候處故、都而よろしく何れ新太郎者上之方へ付候而、銘々ゟ差出候節、上中下之位を附ヶ可為差出候、認方其外心得方之儀者、学者ゟ新太郎へ問合可申事ニ而、是者下へ組候訳ニ者無之候、一件者書籍并章句と茂好候方宜敷候得共、初而之事故、此度者無其義、追々呑込候上者書出しニ応し、好ミの章句も有之、席上之弁書も可申付候、席上之弁書とて茂、其日四ッ時か五時ゟ八時頃まてニ、次間ニ而引取認候事ニ而、席上之講釈等之義とハ違ひ候間、手ニ入候得者、隨分無程出来可申候、先一通り、此度之弁書差出候を、上中下を附ヶさせ可差越事、

右之趣、浜松小河三郎迄可申遣候、

未十月

同年十二月

（朱筆）「四」

未十月
慎居候家中屋敷江、病気ニ候迚、寺院等呼入、祈祷いたし候義ニ付申遣候書付、

二本松未央満母病気不相勝候付、城下止宿いたし居候江戸千駄ヶ谷遠了院呼入、祈祷為致候由、一介咎中之儀ニ候上、医師とも相違ひ、祈祷等之儀者、外ニ而不罷越候とも出来いたし候事ニ候間、以来者右様之義者、不承届候様可致候、

但、目付江茂、以後之心得申達置候様存候、

（朱筆）「〇」同七年申二月

（朱筆）「五」

申二月
急養子判元見届手続書上候様申遣候書付、

急養子判元見届之時、最初申出候時ゟ願書請取迄之手続、委細可認越事、

申二月

同年三月

（朱筆）「五五」一浜松江宿次到来之節、并差立候節之義ニ付而之事、
（朱筆）「五六」一浜松御逗留中　御参詣并御巡見之事、
（朱筆）「五七」一御規式御出之節、以来古格之通、御用人御差立之御改之事、
附、御用人差支候節、御近習ニ而御先立之事、
（朱筆）「五八」一大坂表万端取計之心得、諸役江達之事、
（朱筆）「五九」一御居間ニ而、老共隠居御着城御祝義申上候之事、
（朱筆）「六十」一西来院安置仏像御尋之事、
（朱筆）「六一」一老共家督跡目御礼之事、
附、御槍奉行、御手熨斗被下置候之事、
（朱筆）「六二」一浜松御発駕前日、諸役人差出候儀ニ付而之事、
（朱筆）「六三」一浜松御移封後之罰文之事、
「同年十一月」（朱筆）
（朱筆）「六四」一御馬廻御中小姓番勤帳、宅へ判取ニ歩横目遣候義止候様之事、
「同年十一月、御勝手方」（朱筆）
（朱筆）「六五」一御省略御主法御取締ニ付而之事、
（朱筆）「六六」一御主法ニ付、公金之外、年数御改切之儀ニ付而之事、
「同年十二月」（朱筆）
（朱筆）「六七」一御馬廻御中小姓下立判取帳、御目付評議之通申付候様之事、

（朱筆）「〇」文政六年未七月
（朱筆）「一」坂東仁衛門者、下屋敷附ニ而、隔番ニ可有之處、一時之参詣事等と違ひ、時々一・二夜ツヽ、止宿と申茂、如何ニ存候事、

（朱筆）「二」未十月
士軽出奔者取扱之儀ニ付、相改メ候義
申遣候書付、

士軽出奔者取扱之儀、中ニ者煩雑之義茂有之、殊ニ尋相済候処と、出奔届之處と咎方弐重ニ相成、不相当之様ニ存候間、六郎左衛門江茂内々相談いたし候處　公儀御定并外私領取扱方善振等見合、作略有之方と申出候間、別紙是迄之書付へ致掛紙候通相直し、并此度直し之方清書と弐冊相達候、右ニ而何れ存念茂無之差支之筋も無之候者、取極可申候間、目付共江も要用之心得ニ可相成處、計存念承り、後而（強）異論無之様取計否申越候様、可申遣事、
未十月

（朱筆）「三」未十月
文学弁書申付候儀ニ付、申遣候書付、

家中武芸之義者、目六（録）免許等茂見分いたし候而茂、其人（ママ）人之業之高低茂相知れ候得共、文学之儀者、読書・講書之差別者有之候とも、講書之分何れ之高低も難定、縦ハ仮名附事可口授等ニ而講し

（朱筆）「廿四」一勤向ニ付、差扣伺ニ付而之事、
（朱筆）「廿五」一御直書付并御仕置御下知書等、文格認直渡義ニ付而之事、
「同年閏八月、御勝手方」（朱筆）
（朱筆）「廿六」一御勝手方并吟味役、江戸年々勤番之儀ニ付而之事、
「同年十一月、御勝手方」（朱筆）
（朱筆）「廿七」一江戸扶持米、金送之方御益有無、評義之事、
（朱筆）「廿八」一御用金御見合之儀ニ付而之事、
「同年十二月」（朱筆）
（朱筆）「廿九」一川澄兵右衛門儀、賄賂一件取調之義ニ付而之事、
「〇同八酉年正月」（朱筆）
（朱筆）「三十」一士分軽輩縁組不致儀ニ付而之事、
「同年四月」（朱筆）
（朱筆）「卅一」一異国船御手当、御領分海辺出張之義ニ付而之事、
「同年五月」（朱筆）
（朱筆）「卅二」一異国船御手当、三手評儀之義ニ付而之事、
（朱筆）「卅三」一出張人数着服小襠陣羽織之儀、并足軽番之事、
（朱筆）「卅四」一遠見番之儀、注進等之事、
「同年五月、御勝手方」（朱筆）
（朱筆）「卅五」一村々永年季居免鍬下等願之儀ニ付而之事、
「同年七月」（朱筆）
（朱筆）「卅六」一異国船御手当、再評義ニ付而之事、
（朱筆）「卅七」一御役成ニ付、為御祝儀大赦之儀ニ付而之事、
（朱筆）「卅八」一御着城之節、御者頭以上御道筋、　御目見之節ハ、御駕脇之者披露之事、
附、御家老・年寄共、隠居者不及披露義之事、
（朱筆）「卅九」一御通行ニ付、大津ゟ伺之義ニ付而之事、
（朱筆）「四十」一浜松御通行ニ付、郡奉行ゟ伺書之儀ニ付而之事、
（朱筆）「四一」一浜松御逗留中御日割之事、
「同年八月」（朱筆）
（朱筆）「四二」一役成并役替被　仰付之儀ニ付、評儀之事、
（朱筆）「四三」一御褥・御刀掛御用次ニ付而之事、
（朱筆）「四四」一浜松御着城ニ付、郡奉行伺書ニ付而之事、
（朱筆）「四五」一御入部之節、町人百姓其外下座之儀ニ付而之事、
（朱筆）「四六」一浜松御逗留中、寺社　御目見之儀伺書之趣ニ付而之事、
（朱筆）「四七」一此度　御昇進ニ付、二本松未央輔父一介蟄居御赦免之儀、上野青龍院江親類ゟ申通、同院ゟ願候付而之事、
（朱筆）「四八」一大坂御城代被蒙　仰候ニ付、被成下候　御書之事、
（朱筆）「四九」一御着城ニ付、絵図并御次第書ニ付而之事、
（朱筆）「五十」一御着城御祝儀之節、宇兵衛・源左衛門心得之事、
（朱筆）「五一」一御着城御祝儀唱方之儀ニ付而之事、
（朱筆）「五二」一浜松御居間ニ無目鋪居入れ候之儀ニ付而之事、
（朱筆）「五三」一御着城之節、御通り道之儀、并披露人之事、
（朱筆）「五四」一御着城御祝儀之節、老共御国際ニ伺書ニ付而之事、
「同年九月」（朱筆）

御書付

目録

「〇文政六未年七月」（朱筆）
「一」（朱筆）一坂東仁衛門御下屋鋪附ニ而、時々外止宿ニ付而之事、
「同年十月」（朱筆）
「二」（朱筆）一士軽出奔者御取扱之儀、御改メニ付而之事、
「三」（朱筆）一文学弁書之儀ニ付而之事、
「同年十二月」（朱筆）
「四」（朱筆）一慎居候御家中屋鋪江、病気ニ候迚、寺院呼入祈祷ニ付而事、
「〇同七申年二月」（朱筆）
「五」（朱筆）一急養子判元見届、手続書上候様之事、
「六」（朱筆）一御家中御咎申渡句〻之事、
「同年三月、御勝手方」（朱筆）
「七」（朱筆）一日光御用掛ニ付、御手当之積講之儀、掛合無之儀ニ付而之事、
「八」（朱筆）一御省略筋之儀ニ付、及差図前後不申上候儀ニ付而之事、
「同年三月」（朱筆）
「九」（朱筆）一諸役ニ而評議事可被　仰付義ニ付而之事、
「十」（朱筆）一寄合小普請、愈御規格通可取計旨之事、
附、役儀年来相勤候者、又ハ御見出ニ而転役等之者、勤方ニより、時々新規御加増等ニ被下置候之事、
「同年四月」（朱筆）
「十一」（朱筆）一急養子、判元見届之儀、手続相改メ候趣、御目付へ達之事、
「十二」（朱筆）一急養子願書差出方并見届等之儀、諸士心得ニ達候事、
「十三」（朱筆）一御家中二男ニ而御呼出之者、給人以上ニ御取立之分ハ、是迄之通り、養子相成、無足ニ而実子無之分ハ、以来養子不相成事、
附、軽輩共ニ者、次男之分ハ、養子不相成事、
一軽輩共忌服以来者、定式之通請候様之事、
「同年五月」（朱筆）
「十四」（朱筆）一御家中御用召之儀ニ付、御尋之事、
「十五」（朱筆）一評義取調之儀、役々江可申達義ニ付而之事、
「十六」（朱筆）一御便到着之節、廻し方之儀并御用召ニ而申渡前日・即日之義、取調可差出与之事、
「同年六月」（朱筆）
「十七」（朱筆）一御政事筋御目付江談候哉ニ付而之事、
「十八」（朱筆）一御用召之者、呼出方并刻限之儀ニ付而之事、
「十九」（朱筆）一承付之書面、老共方へ仕廻置候様之事、
「同年七月」（朱筆）
「二十」（朱筆）一書付類、帳冊半切と差別之義ニ付而之事、
「廿一」（朱筆）一御留守中、飛脚到来ニ付、御用召申渡等之儀ニ付而之事、
「廿二」（朱筆）一諸役評義書之儀ニ付而之事、
「廿三」（朱筆）一諸役評議書取扱方之儀ニ付而之事、
「同年八月」（朱筆）

申候、常ニ事替りたる願書等ニ而、難取上候者、奉行出仕之上相達可任差図候、

一吟味方之吟味物者、手透次第、四ッ時前ゟ初候而不苦候、奉行之吟味物者、四ッ時出仕後、手廻し次第可致吟味候、

一遠在之者、願筋ニ而吟味物、其日可相済候者、少々延引いたし候而も不苦迚も、其日ニ不相済候ハヽ、手廻し致し、朝之内承り、早々帰し可申事、

一奉行初退散者九ッ時頃、用済次第勝手次第ニ候、乍然、難延用向を打捨退散致す間敷候、

寄合日

一寄合日者、月々六度位、会日之外たるへく候事、

一寄合日者、当番之三手者、六半時出仕、奉行其外非番之三手者、五ッ時出仕之事、

一願等六ッ半時ゟ可取上候、手廻し次第、吟味方之吟味も可致候、

一奉行吟味之義、五ッ時ゟ訴訟承之、夫ゟ公事可致吟味候、裁許物等可申聞候、

一退散者、平日之通、九ッ時頃用済次第者可心得候、

一老共内聴等致し候吟味物者、昼後可致詮義候、

一目付役壱人、五ッ時出席可致候、退散者外役人同刻之事、

午十月

御別紙

（朱筆）「九」別紙申付候義共、初ゟ悪布事与心得、又者悪敷者与心得候而、其通申付候事者無之道理ニ候、下ゟも難申出事ニ候間、相考候處、右様存外粗齬いたし候者、全其筋江拘り候下役人之内、賄賂ニ迷ひ、右様成行候事与被存候間、郡奉行初郡方ニ拘り候者共、賄賂受用之義、早々取調申付可申越候、

一郡方調役之義、役名上与同様ニ而、如何敷候間、以来郡奉行支配吟味方与、役名相改可申事、

一都而吟味之義、可成丈郡奉行いたし、書留者調役可致事ニ候間、其心得可申遣候、

一吟味之義、奉行吟味いたし候を、調役脇ニ居承之、奉行相済候跡ニ而、只今之申口、不残承紛書留候事、奉行右与申し調役吟味ニ而、左与申様ニ相成候而者不宜候間、初メ之奉行右与申処、左らしく候者、其段奉行江申達、再席之上、奉行ゟ吟味直し可申事、是者、通例之事ニ候、尚是ニ而不都合之事も候ハヽ、又可申越候、

一吟味伺書之類者、調役ニ為調可申事、

一在町ゟ之願書等、九ッ時頃迄ニ取上候由、遠在之者者、難渋之由、已来相改難渋不致候様可仕事、

十月

御別紙

別紙之通、取極差支之有無相紛、并郡方をも相紛申越候様、可申遣候、

存候、左候得者、家中之者ともへ、積年ニ此上困苦相懸ヶ候ゟ、家中之者共ニ成行り、自身両御役義辞候方、眼前三千金程之省略も相立、尚又世間□（虫損）合之進退も無之、并諸借財方取扱等も、自然致し能筋も可有之与存候間、今度者、右退役を本ニ致し、万事省略可致方与存候、勿論昨年も退役内含有之候得共、当年ニ而調役五ヶ年之勤役ニ相成　公儀御定之御奉公、年数も相済候事故、当時退役願候共、聊不本意之筋者無之候間、此段相談旁申聞候、浜松江も申遣、早々存念可被申聞事、

午三月廿六日

同年六月

「六」（朱筆）二本松一介義、近来的場出来、弓稽古与名付、家中之者呼集メ、後者酒食耳ニ耽候由ニ付、小河三郎出府之節も申聞候、何れ沙汰も不致候而者、相成間敷、且又此度司徒出奔ニ付而者、専ら一介取扱ゟ、右様之次第ニも相成候哉ニ相聞申候、旁不恙之事ニ存候、右之外ニも不恙之義も可有之、且司徒妻離縁一件等、尚委敷相糺、此外之義も委曲相糺可申候、尤、最初小河三郎申聞候事故、此度取調も小河三郎懸りニ而、取調出来次第、早々可申越旨可申達、

同年十月

御別紙

二本松一介

「七」（朱筆）右、先年勤役中、種々不埒之取計有之、存知不応ニ付、格別之勘弁を以、内々及沙汰、願之上役義差免候上者、別而可相慎處、屋敷内江的場等補理、弓稽古之由ニ而、家中之者呼寄、是迄度々致酒食、兼而側向勤候者者、親類たり共突合者心得可有之義、其上、酒食等之義ニ付而者、別段直ニ申付置候筋も有之處、其義をも不相用、殊ニ今度拝郷司徒出奔一件ニ付而者、近親与者乍申家内之者共をも差置、一介壱人之我意を以、萬事取計候ゟ、当時之姿ニも成行候由ニ相聞、其外常々不恙之義とも申触候之段、委細達聞、側近之勤柄、殊ニ一旦役義をも相勤候身分ニ者有之間敷、重々不埒至極ニ付、蟄居可申付候、

右之趣、小河三郎江可申遣候事、

十月

「八」（朱筆）郡奉行共、平日寄合所江、出仕方時刻遅、四ッ時過ニも相成候ニ付、段々手後レニ相成、下方迷惑之由ニ候間、以来左之通相定、支有之間敷哉、

平日

一平日寄合所江出仕之義、代官之内壱人吟味方壱人、手代弐人、当番取極、当番之者者朝五ッ半時迄ニ出仕之事、

一郡奉行両人共、并前書非番之者者、正四ッ時迄ニ出仕之事、

一在町ゟ之願書等出次第、朝五ッ半時ゟ前書三手、当番之者取計可

合ヲ以可相渡事、

右者、吟味役所規定ニ可為書入候、

御別紙

都而渡方を操上取越請取候者、出奔、或者暇等ニ相成候者、過渡し分捨之事、尤、勘定之節、其訳可認入候、

右者、蔵奉行役所規定江可為書入候事、

（朱筆）「〇」同五年午二月

（朱筆）「四」初ヶ条之趣、至極親之勤巧（功）ニよつて、召出候姿故、尤之事ニ存候、則諸役人五ヶ条之次江加へ可然候、

一右ヶ条番方之部ニ入候而者、諸役人与同様ニ相成、勤功有之者も、無之者も同様ニ而者、如何敷候、総而此度規格之義者、諸役人ゟ番方ハおとり、番方ゟ者寄合者おとり、寄合ゟ者小普請ハ尚おとり候心得ニ而、勤功も自然四段ニ相立可申候、左候時者、同格ニ相成候而者、諸役人之勤功顕れす候事、

一両ヶ条目寄合忰之事、是も前書ニ準候事与存候得共、是又前件之段取ニ見合候而ハ、一等下し候方、却而正敷可有之哉、

右忰呼出事、規格書ニ而者、一芸皆伝与認有之故、手重之様ニ候得共、隨分一芸之皆伝者可也ニ、年頃ニ相成迄ニ者可被心得候、存之外呼出者多く不絶様ニ可相成候、前書二ヶ条之義ニ候者、追而改り事も大儀ニ抱り候与申程之事ニも無之間、其模様次第与存、先加筆之所を見合置、行ひ候而之様子次第可然哉、

一二ヶ条目者、別紙之伺通、心付之義可然候、

一四ヶ条目之義も、此度士分之四等規格相極候之上者、軽輩之方ニ而も、諸役人之内、茶道・料理人頭以上、歩横目已上、諸小役人・足軽・坊主・寄合・小普請、其外共士分之規格ニ見合せ、ヶ条之廉ニも不残取調、伺越候様可致候、其内江、此ヶ条之趣も可然書加へ可申候、

（朱筆）「五」一別紙帳冊、此方江留も致し置可返候、

勝手向之義、是迄追々勘定積立之通、年増必迫可相成者、眼前之所、当年ニ至候而者、諸借財方も調兼候由、礑与逼迫ニ至リ申候ニ付而者、此上格別之厳法相立、省略致し、且、家中も尚又減米可申付哉之旨被申聞候ニ付、致勘考候處、自用方之義も、卯年以来者逐々省略相付、未た十分与申ニも無之哉ニ者候得共、右凡略法付候様ニ与存、此上者、省略候与も目立候程之義者、出来間敷、且家中之義も、当時之渡方ニてさへ、一統困窮、殊ニ其口を凌兼候者も不少候處、此上増引米等申付候而者、愈以家中困苦為致候理ニて仕義ニ依而者、追々分散等致し候様ニも可相成、其上下ニ而者、格別困難増候得共、上ニ取り候而者、夫程之益も無之、聊之義ニ有之候得共、何分此上之減引米者、容易ニ難申付、只管ニ自身費用相減候ゟ外者無之与存候、然處、右様累年困窮相畳候も、元来収納米其外格段減候ゟ之義ニ而、其上御役方入用者、不時之費も有之、平生ニ而者、凡三千金位之事与

自筆ニ而認候義も、一人ニ而可致候、
但、病気ニ而不致出仕、三日以上ニも相成候ハヽ、格別、差急候用者取調置候書付類相添、伺事申渡申達等之義、当番可頼候、是者事之落着之處、計頼事故、当番之懸りニ者不相成候事、
一右同断之節、宅ニ而可埒明事者、不及前書之義ニ候、
一右同断、長引候病体ニ候者、取調置候書物相添、一旦ニ無之共、追々同列江可引送外、同列ニ而割合可引受候、
一銘々懸りニ而引受候事、其之内定たる義者引受候者ゟ、同列江一通演説之上可取計、不定之義者、掛り之者取調、且者存念をも相述、同列江及相談可決着、早速ニ難埒明用向者取調置、会日ニ同列と致評論可決着候、総而会日ゟ次之会日迄之内ニ、銘々掛之事共、埒明候様可致候、
一前書之通、銘々之掛りニ而可取計候得共、格別大なる一件者、口々之義も有之物故、惣懸リニ而、口々を銘々江引受、手間不取候之様申談可取計候、僉議事等ハ、大一件ニ而も、壱人ニ而引受可申、格別入組候僉議之節者、当番引受可取計、夫迄懸ニ相成居候用向も差急候分者、調置候書付類相副、同列江引送、外同列ニ而割合可引受候、
一両地江便之節、自筆も銘々掛り之分計可認候、江戸ゟ初而申遣候義、又者浜松より初而申来候用向者、便致着之日も、当番懸りニ相成候事、
一勝手方も同役有之節者、前書ニ可準事、
右之通ニ相心得、事之軽重ニよらす、銘々懸り之用向を、猥りニ同列江譲り申間敷事、

同年九月

（朱筆）「三」別紙二通規定之趣、浜松江可申遣候、
文言者、年寄ゟ相渡候事故、可然取直し候様ニも可申遣候、尤、差支之筋も有之候ハヽ、何ヶ度も可申越候事、
一荷物貫目之事、
右者、江戸廻し供用看板荷物貫目、御定ゟ重ク候而、途中酒手之義も候故、石川三左衛門江駄賃之外金百疋為心付遣候様子ニ有之、右ニ者三左衛門江之心付ニ候ハヽ、賃銭又者酒手之方へ当て候ニ者、紛敷候間、已来別紙之通ニ而可然存候事、
一過渡捨之事
右者長岡吉之助蟄居以前、渡方取越請取候所、咎ニ相成、米納中出奔ニ付、其近親之内引請上納可仕例故、伯父近藤十郎兵衛江上納候様申達候様子ニ有之候、元々加判証人抔与申訳も無之ニ、近親ニ候とて引受候者、不当之義与被存候事、依而別紙之通可然哉之事、
御別紙
道中運送荷物貫目、御定ゟ重く当候人馬ニ而者、可兼持時人馬増申付候ハヽ、格別、左も無之時ハ、増賃又者酒手等、其割

一家とへ対してハ、何れ之方か情ニ堪へき哉、元々一家・一領之為ニ、他之借財を致す事なれハ、一家・一領ハ枯槁衰術するとも、他之財宝ハ返し、他人江義理を尽して後、一家・一領よりの怨之溜薮と成るを厭ハすとハ、不分義と存候、保言（本ノマヽ）ニも背負子より抱子なといへるも有之、銘々一身之上ニ取りて可考置哉、他之借財ニ責らるゝとて、家居を打潰し、借財を済し、或ハ妻子眷属江衣食も不喫して、他之借財江義理を尽すへき哉、極貧之者者、左も可有之候得共、左程ニ至れハ、翌ニも遁逃して、妻子眷属も打捨候仕義ニ至るハ、世を渡る者とハ言かたかるへし、彼是考るニ、当時公訴、又者格別難遁借財ニてもあらハ無據候、当時ハ未た夫程之向も不相見、一家内・一家居を潰さすとも、外ニ手段尽之ハ、第一ニ他を制し、第二ニ領中其次家中与、都而借財方取扱之上ニ盤、返済之仕法手段致候方ニ可有之と存候、又別論ニ他借を致すハ、則一家之為なれハ、一家を振ひ尽し難苦させても、借財之身返弁し、他人江義理を立置者、又借出して、一家之為ニなると申者聞へたる様ニて、聞へぬ義理ニ候、其様ニ他人之金銀か手侭ニならハ、天下挙而他借を専ら可勤、其上一家之為与申せハ、元一家を苦しめさる為なるへきを、其為ニ苦しむハ、何之義を、他借を猥りニ返弁するハ、却て一家を亡す本か、今ニ至りて自他与見競へ、何れ江厳法を下すへきと思案之時、内を空虚ニして、外を實ニする事ハ、古今道理之上ニも無之、譬ハ樹木之如く、外ゟ枝葉を伐取りても、又脇之枝葉江勢を得て、却而其木之為ニ者なれり、然るニ根、或ハ木之真より朽腐を生すれハ、勢尽る時ニ至りて、今迄繁茂したる枝葉も、一時之烈風等ニ倒転し、速ニ枯槁す、其時ニ臨ミて、根本江培するとても、無益林葉而已常ニ繁茂するも、頼むへからす、然らハ先他之枝葉を伐て、根本江培して後、再ひ新枝モ長する期を待得ハ、如何様ニも木振を直すへきか、先しハらく幹を伐りて、別ニ林葉を求るハ、却而有余ある時之手段なるへし、当時之姿ニ而者、一時家中之給米を減すとも、可弛時もなく、領中之金子を借被置とも、是又可返時もあるまし、本末を取違法之下し易きとて、猥リニ幹を伐ハ、不順之政、殊ニ一単之浅術と存候、是等之大意者、去年平助・庫之助出府之節申論、何れも同意之事なれハ、厚勘考之上可取計欤、乍去、理屈計と申せ盤、申様なるものニてもあるへし、金銀之融通者、理外とも可申問、尚面々心付たる計策も有之ハ、無遠慮可申出候事、

六月

（朱筆）「〇」同四年巳六月

（朱筆）「一」　年寄共当番之節、

用向取扱規定

一両地共、年寄共当番之義者、其日之用番ニ候得者、当番中出候諸用向・諸願差扣伺、諸届等ニ至る迄、其事之終迄引受可取計、

此度勝手向差支ニ付、委細申越候趣致承知驚入候事ニ候、尤、昨年積リ高打詰候勘定故、臨時出候事者、必然ニ候得共、何れ茂初骨打(折)、吟味役共迄も抜群出精故、先是迄者操合成處、当時ニ至リ行詰候義者、何とも驚歎之事ニ候、右ニ付而者、尚此上主法も附、手段も有へきハ、尤之事ニ候得共、主法と申ても、此上附方も有之間敷、少々宛之減者付候とも、中々壱万近く之不足補候義者、難出来与存候、何そ可然補方も有之哉、兼々我等愚意ニも、此上家中江減渡等申付候者、手を濡さすして益も可有之術ニ候得共、当時之處ニてさへ、一同困窮之上、尚又減渡等募リ候而者、愈不立行ハ眼前之義、其上義理ニ於ても、君臣者父子ニ準候親愛ニ而、一家内も同様之者故、其功を速ニ務むとて、家中を困むへきニも有間敷、先他を減して後、差逼たる處ニて家中江及し候者無拠義ニ候得共、他を略せすして内而已略するハ、順路ニ戻るへきか、家中江出し置、米銭者則止之、米銭ニ候得者、今ニも入用与申時者、即座ニ厳法も可申付、成丈貯置者異変之備ニ而有之候次ニ者、領中之儀、是も皆上之指揮ニ而、一族を進退すれハ、下ゟ者天被仰き、上ゟも地与臨むハ、一領中之小天地、又者一身一家内を入れ置へき家宝之如し、君臣共ニ身命を繋き、又者雨露霜雪之愁を凌くも、皆領中之民之艱難ニよりて耕耘之粒々辛苦之致處ならすや、然れハ、是も憐むへきものなり、已に衆民者赤子、国君者父母ニ譬たるも聞及へり、是家中ニ続たる思情なるもの故、如何様ニも民之困窮を救ひ有てこそ、領主之甲斐とも可申哉、如此之事なれハ、領中ゟ借用之金銀抔も不約束ニ不相成様、義理者立度ものと存候、一国一領之財宝者、則上下之備故、何時ニても借集る事者安かるへし、火災其外不時之異変等之節、課役抔村割ニ申付、時も常ニ義理を立をけ候、速ニ可用立、然るを他向を略せす、領中之借財ハ借居置とも、別而彼是不申とて油断ニ過るハ、往々ニ至りて可差逼ハ、眼前ニ可有之、果急之備ハ勿論無之様ニ相成へし、歎ヶ敷事と存候、如此今ニも可差逼期ニ臨みて、狼狽するハ、屋上江罅穴を設け、雨露霜雪之侵すを、愁か如く無益事か、他江厳法を施して後一領ニ至るハ、不得止事時なれとも、可好義ニ者無之哉与存候、其上一家中・一領中江厳法等申付るハ、命令なれハ畢竟役人之不取事とも可存なれとも、皆とも ニ天を戴中之事故、下ニ而も専ら命令之源者、何所かと可考、其果者上江怨を結ぶより外有まし、縦へ下之怨を不責とも、上下之情愛ニ於いてハ、群下之艱苦を見るハ、難堪處ニ候、又、他向之借財抔者、上之命令を蒙りて、金主江対談いたすとハ申なから、銘々面会之上ニ而、立派ニ期日約定等も致し置事なれハ、連約ニ至りてハ懸りたる役人之面皮も難立と申處ハ、同し約定致たる一家中・一領中江臨む、上之一人之情愛よりも、難渋・迷惑ニ可存義も、或可有之候得共、如何様ニ致し而も、一家・一領を振ひ尽しても、約束通期日者、立度ものニ候處、他ハ他なり、一家・一領ハ、一家内・一家居与聢与見競へて、扨此處ニ而他と

「監憲録・浜松告稟録」

――史料翻刻――（二）

神崎直美

「（表紙）自文政三年庚辰六月
至同十一年戊子八月
浜松告稟録　一　二　三　」

御書付
目録

「○文政三辰年六月、御勝手方」（朱筆）
「一」（朱筆）一御勝手向之儀ニ付　御書付、
「○同四巳年六月」（朱筆）
「二」（朱筆）一御年寄共、当番之節、御用向取扱御規定之儀ニ付　御書付、
「同年九月」（朱筆）
「三」（朱筆）一荷物貫目并過渡之事ニ付　御書付、
「○同五午年二月」（朱筆）
「四」（朱筆）一寄合小普請御規定老共、評議之儀ニ付　御書付、
「同年三月」（朱筆）
「五」（朱筆）一御勝手向之儀ニ付　御書付、
「同年六月」（朱筆）
「六」（朱筆）一二本松一介身上取調之儀ニ付　御書付、
「同年十月」（朱筆）
「七」（朱筆）一二本松一介御咎之儀ニ付　御書付、
「八」（朱筆）一郡奉行寄合日并出仕方之儀ニ付　御書付、
「九」（朱筆）一郡方ニ而都而取扱之儀ニ付　御書付、
「○」（朱筆）文政三年辰六月
「御勝手方江被成下」（朱筆）
一　書取